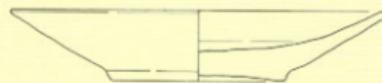


竹シマツ遺跡
宮崎遺跡



1992・3

高知県大方町教育委員会

竹シマツ遺跡
宮崎遺跡

1992・3

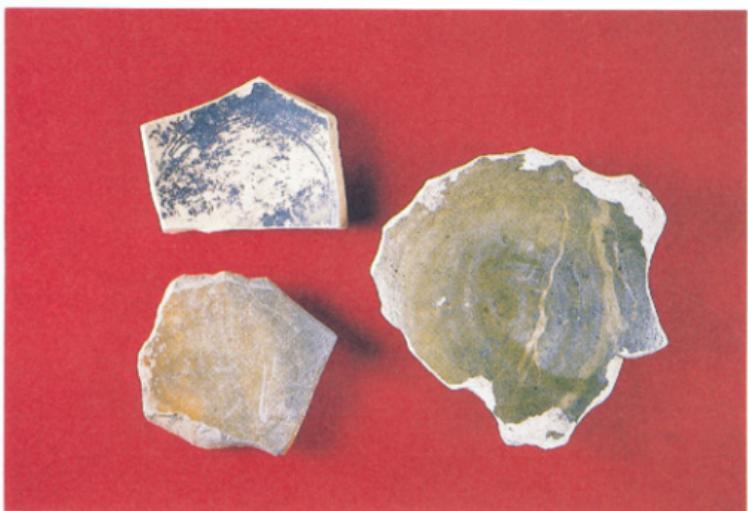
高知県大方町教育委員会



刻書土器（須恵器 高環 128）



刻書土器（製塙土器 129～131）



綠釉陶器（内面 上112, 下113, 右115）



綠釉陶器（外面 上112, 下113, 右115）

序

大方町には縄文時代から中近世にいたるまで数多くの遺跡が確認され、古代より綿々とした人々の生活が営まれてきたことが伺われます。

竹シマツ遺跡発掘調査は、高知県が行った県道大用大方線改良工事に伴う緊急発掘調査で、また宮崎遺跡発掘調査は、猿飼川の河川改良工事中に発見され、急拠調査を行ったものです。

埋蔵文化財は古代住民の生活様式を解明するだけでなく、未来へつなぐ貴重な文化遺産であります。

しかし近年各種の開発事業にともない、一瞬にして貴重な遺跡が破壊される恐れがあり、憂慮すべき事態がしばしば発生していますが、今回の調査にあたっては開発当局の深いご理解により、当初目的の記録保存のための調査を終えることができました。

本書の刊行により、県内はもとより、広く文化財研究の一助になれば幸いです。

終わりに、本調査でご指導いただきました高知県教育委員会文化振興課廣田佳久氏（現、高知県埋蔵文化財センター）及び吉原達生氏（現、高知県立西高等学校教諭）、暖かいご理解とご協力をいただきました中村土木事務所、また作業に従事していただきました皆様や本調査にあたって何かとご協力いただいた関係者及び地域住民の方々に心よりお礼申し上げます。

平成4年3月

大方町教育委員会

教育長 中野 結

例　　言

1. 本報告書は、昭和63年度に実施した高知県幡多郡大方町加持字竹シマツ2,612-2～2,671に所在する竹シマツ遺跡と同町加持字宮崎475に所在する宮崎遺跡の発掘調査報告を収録した。
2. 発掘調査は、高知県教育委員会の指導を受け、大方町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、大方町教育委員会の依頼を受け、高知県教育委員会文化振興課主事廣田佳久（現在、高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員）（竹シマツ遺跡）と同課主事吉原達生（現在、高知県立西高等学校教諭）（宮崎遺跡）が担当した。調査の事務、総括は大方町教育委員会社会教育係長宮川多恵子、同主事畦地和也、同主事補秋森弘信が行った。
4. 整理作業並びに本書の執筆、遺物写真撮影、編集等は廣田佳久が行った。
5. 遺構については、S T（堅穴住居址）、S K（土坑）、S D（溝跡）、P（ピット）で標示し、遺構ごとの通し番号とした。
6. 遺物については、土師器、黒色土器、須恵器、綠釉陶器、硯、墨書き土器、刻書き土器、製塙土器、土製品（土鍤）、石製品（硯・叩石）ごとにまとめ、縮尺 $1/80$ で実測図を載せた。ただし、縮尺を変更しているものもある。なお、番号は通し番号で、実測図の番号と図版の番号は一致している。
7. 発掘区の設定並びに遺構の測量にあたっては、任意座標で行った。標高は海拔高を示す。
8. 遺構の縮尺率は、S T が $1/80$ 、S K が $1/60$ で掲載し、方位（N）は極北である。
9. 調査にあたっては、高知県中村土木事務所、大方町文化財調査委員会、地元関係者の方々に協力を得た。また、整理作業では高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から助言を得、同センター整理作業員の皆様に御協力いただいた。記して感謝する次第である。
10. 出土遺物等は大方町教育委員会において保管している。

目 次

第Ⅰ章 序説	1
1. はじめに	1
2. 遺跡の地理的、歴史的環境	3
第Ⅱ章 竹シマツ遺跡	7
1. 調査の契機と経過	7
2. 調査の概要	8
3. 遺構と遺物	11
第Ⅲ章 宮崎遺跡	15
1. 調査の契機と経過	15
2. 調査の概要	17
3. 遺物	19
第Ⅳ章 総論	49
1. 竹シマツ遺跡の年代と性格について	49
2. 宮崎遺跡の年代と性格について	50
3. おわりに	52

挿 図

Fig. 1	大方町位置図	3
Fig. 2	調査地点と周辺の遺跡分布図	5
Fig. 3	竹シマツ遺跡周辺の地形図	7
Fig. 4	調査区全体図及び発掘区設定図	8
Fig. 5	試掘トレンチセクション図	9
Fig. 6	拡張区遺構平面図	10
Fig. 7	S T - 1・2	11
Fig. 8	T R 1・2, S K - 1	12
Fig. 9	S D - 1～3	13
Fig. 10	宮崎遺跡周辺の地形図及び試掘トレンチ設定図	15
Fig. 11	調査区全体図及び発掘区設定図	16
Fig. 12	試掘トレンチセクション図	18
Fig. 13	土師器形態分類図	24
Fig. 14	須恵器形態分類図	24
Fig. 15	遺物実測図1(土師器)	37
Fig. 16	遺物実測図2(土師器)	38
Fig. 17	遺物実測図3(土師器)	39
Fig. 18	遺物実測図4(土師器)	40
Fig. 19	遺物実測図5(土師器)	41
Fig. 20	遺物実測図6(土師器, 黒色土器, 須恵器)	42
Fig. 21	遺物実測図7(須恵器)	43
Fig. 22	遺物実測図8(須恵器, 緑釉陶器)	44
Fig. 23	遺物実測図9(硯一転用硯一)	45
Fig. 24	遺物実測図10(黒色土器, 刻書土器, 製塙土器)	46
Fig. 25	遺物実測図11(土錘, 石硯, 叩石)	47
Fig. 26	遺物実測図12(叩石)	48

表

Tab. 1	大方町埋蔵文化財発掘調査（確認調査も含む）一覧表	2
Tab. 2	調査地点と周辺の遺跡分布表	5
Tab. 3	管状土錐計測表	25
Tab. 4	遺物観察表1（土師器）	26
Tab. 5	遺物観察表2（土師器）	27
Tab. 6	遺物観察表3（土師器）	28
Tab. 7	遺物観察表4（土師器）	29
Tab. 8	遺物観察表5（土師器、黒色土器）	30
Tab. 9	遺物観察表6（黒色土器、須恵器）	31
Tab. 10	遺物観察表7（須恵器）	32
Tab. 11	遺物観察表8（須恵器、綠釉陶器、硯）	33
Tab. 12	遺物観察表9（硯、墨書き土器、刻書き土器、製塙土器、土錐）	34
Tab. 13	遺物観察表10（土錐）	35
Tab. 14	遺物観察表11（土錐、石硯、叩石）	36

図 版

卷頭図版1 刻書き土器（須恵器 高杯 128）	PL. 4 遺構完掘状態（南より）
刻書き土器（製塙土器 129～131）	遺構完掘状態（北より）
卷頭図版2 緑釉陶器（内面 上112、下113、右115）	PL. 5 S T - 1・2（南より）
緑釉陶器（外面 上112、下113、右115）	S T - 1・2（南より）
竹シマツ遺跡	PL. 6 S D - 1（東より）
PL. 1 調査前全景（南より）	S D - 3（西より）
調査前全景（西より）	宮崎遺跡
PL. 2 試掘トレントR 1（東より）	PL. 7 試掘トレントR 1（東より）
試掘トレントR 2（東より）	試掘トレントR 2（東より）
PL. 3 遺構検出状態（南より）	PL. 8 T R 1 北壁セクション（南より）
遺構検出状態（北より）	T R 4 西壁セクション（東より）
	PL. 9 遺物出土状態1
	PL. 10 遺物出土状態2

PL. 11 出土遺物 1 (黑色土器 内面・外面)	PL. 17 出土遺物 7
PL. 12 出土遺物 2 (須恵器 鉢, 夷)	PL. 18 出土遺物 8
PL. 13 出土遺物 3 (製塙土器 外面・内面)	PL. 19 出土遺物 9
PL. 14 出土遺物 4 (刻書土器, 土錘)	PL. 20 出土遺物 10
PL. 15 出土遺物 5 (土錘)	PL. 21 出土遺物 11
PL. 16 出土遺物 6	PL. 22 出土遺物 12

第一章 序 説

1. はじめに

本書は、昭和63年度に高知県中村土木事務所（道路第1班）の委託を受け実施した竹シマツ遺跡と同年同事務所（河港第1班）の依頼を受け実施した宮崎遺跡の緊急発掘調査の概要報告をまとめたものである。

竹シマツ遺跡は、高知県教育委員会が昭和61年度から10ヶ年計画で実施している高知県遺跡詳細分布調査¹⁾の際発見された遺跡であり、一方、宮崎遺跡は工事中に発見された遺跡である。工事中に発見された遺跡は、他に隣接する屋敷前遺跡などがある程度でその数は少ない。大方町にはこれらを含め現在87の遺跡が確認されており、この内の約8割が前述の遺跡分布調査の際発見されたものである。それまでは遺跡も少なく、本格的な発掘調査を実施するまでには至らなかった。ところが、遺跡分布調査以降、高知西南国営農地開拓建設事業などの大規模開発や道路、河川の改良工事が遺跡に少なからず影響を及ぼすようになり、何箇所かで確認調査が行われるようになった。中でも早咲遺跡の発掘調査は2ヵ年に及ぶ比較的規模の大きなものであった²⁾。今回報告するものは、調査規模こそ小さいが、県下では数少ない縄文陶器、転用鏡、製塩土器が出土しており、今後注目される遺跡となろう。

なお、報告書という形態はとっていないが、これら以外にも確認調査（試掘調査）を7遺跡で実施しているので、その概要についてここで触れてみたい。内訳は、高知西南国営農地開拓事業に関連するものが5遺跡、県営圃場整備事業に関連するものが1遺跡、団体営による農業改善事業に伴うものが1遺跡であった。（Tab. 1）

まず、高知西南国営農地開拓事業関連では、早咲工区で亀ノ甲・高知駄場・岡崎・宇町ノ前の4遺跡、出口工区で小坂口遺跡が工事範囲内に入り、早咲工区内の4遺跡については、昭和62年度、小坂口遺跡は平成2年度にそれぞれ確認調査を実施した。早咲工区内の4遺跡は、早咲遺跡の西側丘陵上に立地することと古墳時代の須恵器等が比較的多く表採されることなどから古墳の存在が考えられていたが、ゴルフ場建設に伴う土砂取りや畠地造成などによってすでにその大半は削平されており、亀ノ甲遺跡の縁辺部で10～13世紀頃の遺物包含層並びにピットが検出された程度であった。早咲遺跡周辺には古墳の存在が十分考えられるが今のところその存在を裏付ける明確な資料はなく、今後の課題として残っている。小坂口遺跡は、以前に縄文時代の石蹴が数点表採されたことにより確認された遺跡であるが、すでに削平されていたとみられ、地表約20cmで岩盤となっており遺構の存在を匂わせる資料を発見することはできなかつた。

県営圃場整備事業に伴うものとしては、平成3年度に実施した轟古窯跡の確認調査を挙げることができる。遺跡の所存する浮鞭地区は、遺跡の立地に適した丘陵部が多く、入野の平野部

に次ぐ遺跡数を有し、幡多地区では唯一確認された窯跡である鹿々場古窯跡が存在する。鹿々場古窯跡は少なくとも4基以上の須恵器窯で構成されていたとみられ、時期的には灰原出土の須恵器から8世紀後半から9世紀頃と考えられている。当該遺跡は、鹿々場古窯跡とは丘陵1つ隔てた西側の丘陵先端部に位置し、斜面部から須恵器片が多く表採されることから窯跡ではないかと考えていた。北側には防ノ駄場遺跡、確認されていないが古墳ではないかといわれる箇所もある。調査の結果、近代以降とみられる瓦窯の灰原が発見されたが、須恵器の窯跡は確認されなかった。

団体営による新農業構造改善事業に伴うものとして、昭和63年度に実施した浮津遺跡の確認調査がある。遺跡分布調査の際確認された遺跡で、大分県姫島産とみられる黒曜石の剝片を始めとして中世の土師質土器片まで数多く表採された。しかし、調査では遺物包含層並びに遺構を確認することはできなかった。ただ、水田址ではないかとみられる土層が一部にみられ、場合によっては谷水田を営んでいた可能性もあるが、伴出遺物もなく、本調査を実施するまでの決め手を確認するには至らなかった。遺物が表採されたのは、西側丘陵上に位置する奥尾遺跡等周辺の遺跡からの流れ込みによるものであろう。

以上、昨年度報告した早咲遺跡、今回報告する竹シマツ遺跡と宮崎遺跡以外の遺跡についてその調査の概要について記した。これらをみた場合、高い確率で遺構が残存しているはずなのであるが、明確な遺構が確認されたのは早咲遺跡と竹シマツ遺跡の2遺跡に留まる。また、まとまった遺物が出土したのは早咲遺跡と宮崎遺跡のみである。このような状況から推察すると実際遺構が残っているのは、地表下比較的深い部分に生活面がある遺跡か削平を免れた遺跡に限られるようで、丘陵部は悉く削平され段々畑になっていることから今後発見される機会は極めて少ないと言わざる得ないであろう。このことは、耕地面積が少ないと起因するとみられ、幡多郡、ひいては県下的にも言えることである。

Tab.1 大方町埋蔵文化財発掘調査（確認調査も含む）一覧表

遺跡名	調査の原因	調査期間	調査面積	備考
亀ノ甲遺跡	西南国営農地開拓事業	昭和62年10月12日～10月24日	283m ²	確認調査
高知駄場遺跡	タ	タ	42m ²	タ
岡崎遺跡	タ	昭和63年2月29日～3月9日	60m ²	タ
宇町ノ前遺跡	タ	タ	32m ²	タ
浮津遺跡	農業構造改善事業	昭和63年3月7日～3月12日	126m ²	タ
竹シマツ遺跡	県道改良工事	昭和63年9月21日～10月5日	380m ²	確認調査と本調査
宮崎遺跡	河川改良工事	昭和63年12月8日～12月10日 平成元年3月6日～3月11日	858m ²	タ
早咲遺跡	県道改良工事	平成2年3月6日～3月11日 平成2年6月25日～9月8日	1,528m ²	タ
小坂口遺跡	西南国営農地開拓事業	平成2年10月1日～10月5日	40m ²	確認調査
鹿々場窯跡	県営圃場整備事業	平成3年1月21日～1月26日	62m ²	タ

2. 遺跡の地理的、歴史的環境

(1) 地理的環境

大方町は、高知県の南西部に位置し、行政区画では幡多郡に属す。東を佐賀町、西と北の大半を中村市、北の一部を大正町の1市2町と境を接する。面積112.51km²、人口約11,000人を有し、名勝として国の指定を受けた入野松原のある風光明媚な土地として広く知られるところである。特に、最近ではこの入野の浜を利用した「はだしまラソン」や「砂浜美術館」などの企画が好評で全国的にも注目されている。また、砂地を利用した 辣茎の栽培も栄んで、「くじらっこよう」として売り出している。

さて、この大方町には6本の中小河川があり、遺跡はこれら河川によって形成された沖積平野や丘陵と海岸に面した海岸段丘に分布している。丁度、東と西に海岸段丘、中央部に沖積平野と丘陵といった地形を呈している。今回報告する2遺跡は、中央部の沖積平野の縁辺部と丘陵の先端部にそれぞれ位置する。この平野部は加持川とその支流である猿飼川の西側を中心に展開しており、入野と呼称され、大方町では最も広い平野部で海岸部には延長約3kmにも及ぶ入野の浜を有する。入野の平野部はほぼ全域が砂地であり、かつて入野全体が海であったことを物語っている。早咲遺跡などは正にこの砂地に立地する遺跡である。入野の平野部の北部が加持と称される部落である。以前は鹿持と書き、中村一条家を蔵って京から下った飛鳥井雅量（後、雅春（1582～1662）の時鹿持姓を始称する。）がこの地を授かり、その居城は今日も鹿持城跡として残っており、その名を留めている。この加持の西端に竹シマツ遺跡、東端に宮崎遺跡が所在する。竹シマツ遺跡は東西に延びる丘陵の先端部に位置し、東隣りの小山上には泉福寺跡が残存する。地形的にみて、この小山はかつて竹シマツ遺跡の所在する丘陵と同一丘陵上にあったものと推察される。宮崎遺跡は、加持川の支流である猿飼川の左岸に所在し、位置的には、入野平野の奥まった部分で、三方を山に囲まれている。このような立地からすると街道の要所であったとはいい難いが、縦軸陶器を始めとして転用硯や墨書き・刻書き土器などがまとまって出土していることから官衙関連遺跡とみることができる。このような例から大方町でも意外な所から思いがけない遺跡が今後も発見されるのかもしれない。このような発見はともかくとしても、大方町は遺跡の立地に適した場所が多く、幡多ブロック3市7町村の中では中村市、宿毛市に次ぐ遺跡数を誇る言わば遺跡の集中地域でもあり、埋蔵文化財の保護が今後の課題となろう。



Fig. 1 大方町位置図

(2) 歴史的環境

大方町全体の遺跡については、『早咲遺跡』の中に記したので、今回は報告する2遺跡の周辺の遺跡について少し詳しくみてみたい。

竹シマツ遺跡と宮崎遺跡は、前述のとおり入野の北部、加持地区に所在する。竹シマツ遺跡は加持地区の北西部に位置し、周辺には泉福寺跡、鹿持城跡、田村遺跡、小川城跡そして早咲遺跡が所在する。早咲遺跡の西側の丘陵上には散布地である亀ノ甲・高知駄場、岡崎・字町ノ前遺跡が存在したが、現在は国営農地に変貌している。これらはすべて弥生時代以降の遺跡であり、特に古墳時代以降の遺跡が目立つ。早咲遺跡は弥生時代後期後半と古墳時代後期（5世紀後半～6世紀前半）の2時期を中心とした遺跡で祭祀と集落という2つの性格を持つ。竹シマツ遺跡も古墳時代後期に位置付けられる遺跡であるが、6世紀後半～7世紀初頭に該当し、早咲遺跡より後出する。古代の遺物が出土する遺跡には田村遺跡がある。平野部より一段高くなかった丘陵先端に位置し、入野の平野部を眺望できるという立地条件からすると後述する宮崎遺跡より立地的には適しているとみられるが、日用雑器類の破片が表採される程度である。また、宅地が目立ち遺構の残存状況に大きな期待は持てそうもないようである。中世に属する遺跡としては、田村遺跡、小川城跡、鹿持城跡、泉福寺跡がある。これらは、中世でも戦国期以降のもので、山城とそれに伴う集落と寺といった形をなす。一般に山城（本城）、集落（屋敷）、寺（菩提寺）が1セットとなっているように、ここでもその形態をとる。小川城跡は長宗我部地検帳に記載されている城で、丁度加持川と猿飼川に挟まれた位置にある。城跡の斜面は段々畝に開墾されたとみられる箇所もあるが、頂上の詰部分には土塁が良好な状態で残存する。入野地区は全域を眺望できる最も良い立地にあるといえよう。加持川を挟みこの小川城跡と対峙する形にあるのが鹿持城跡である。鹿持城跡は長宗我部地検帳を始めとして土佐国古城略史、土佐州郡志にも記載された城で著名な城の一つに数えられる。城跡は尾根の先端部に造られた複郭式山城で、基部に堀切を設けている。なお、この鹿持城跡と前述の田村遺跡からは、やや時期が遅れるがN字口縁をなす常滑の大壺がそれぞれ発見されており、現在はふるさと総合センターに復元展示されている。泉福寺跡は、現在もその大半が墓地となっており、残存状況については不明である。

次に、宮崎遺跡周辺の遺跡についてみてみる。宮崎遺跡は加持川の支流である猿飼川の左岸に位置する遺跡で、上流には猿飼遺跡が所在する。この猿飼川は丁度宮崎遺跡の所で東西に分れ、西側の支流には下流から順に屋敷前遺跡、正田鉗遺跡、庄田遺跡、花井川遺跡が所在する。調査された遺跡は宮崎遺跡のみで、その実体が明確なものはないが、散布する土器片から猿飼遺跡が繩文時代、庄田遺跡が弥生時代から古墳時代、正田鉗遺跡と屋敷前遺跡が古代、花井川遺跡が中世に属するとみられる。猿飼遺跡は南北にびる丘陵の先端に位置し、中央部では数少ない繩文時代の遺跡で、後期に属するのではないかとみられる。屋敷前遺跡は前述のとおり工事中に発見された遺跡で、復元できる遺物も何点か出土しており、それからすると隣接する

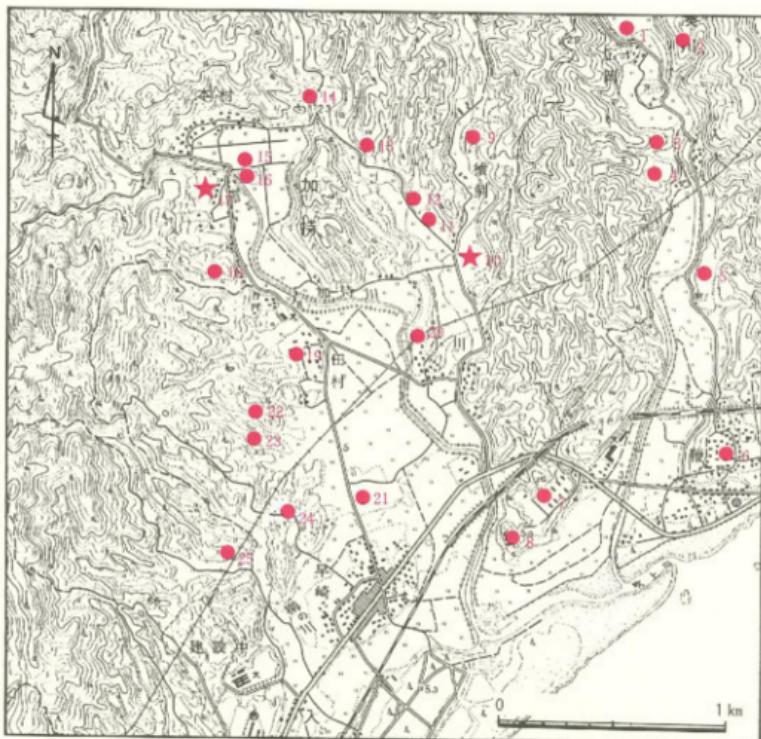


Fig. 2 調査地点と周辺の遺跡分布図

Tab. 2 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	高知神遺跡	縄文～中世	10	宮崎遺跡	平安時代	19	田村遺跡	奈良～中世
2	米津城跡	中世	11	屈敷前遺跡	タ	20	小川城跡	中世
3	コウカ遺跡	タ	12	正田畝遺跡	平安	21	早咲遺跡	弥生～中世
4	寺尾遺跡	奈良～中世	13	庄田遺跡	弥生・古墳	22	宇町ノ前遺跡	古墳・中世
5	防ノ駄場遺跡	縄文～中世	14	花井川遺跡	中世	23	岡崎遺跡	タ
6	腰遺跡	タ	15	加持本村遺跡	奈良～中世	24	亀ノ甲遺跡	古墳～中世
7	弘野遺跡	縄文～平安	16	泉福寺跡	中世	25	高知駄場遺跡	タ
8	吹上城跡	中世	17	竹シマツ遺跡	古墳～中世			
9	猿飼遺跡	縄文時代	18	鹿持城跡	中世			

宮崎遺跡とほぼ同時期と考えられ、関連遺跡とみることができる。正田跡遺跡と庄田遺跡は、時代は異なるが、立地が似ており、それぞれ南北にのびる丘陵の先端部に位置する。規模的には、庄田遺跡の方が大きい。花井川遺跡は中世の遺物散布地であるが、規模も小さく、段々畠となっていることからすでに削平されている可能性もある。

以上、周辺の遺跡についてみてきたが、この入野に集落が形成されるのは早くとも早咲遺跡でみたように弥生時代後期ではないかと思われる。そして、古墳時代後期、中でも6世紀前半までは比較的活発な人為的行為の痕跡を発見することは容易であるが、以後平安時代頃までは目立った痕跡は発見されていない。平安時代は宮崎遺跡を中心とし、鹿々場古窯跡にみる須恵器生産がこの地を発展させたことは想像に難くない。また、この時期には製塩も行われたと推測される。中世になると前時代にみられたような華やかな痕跡は今のところ確認されていない。しかし、戦国期になるとこの大方にも各地区に山城が築城され、群雄割拠の様相を呈す。町内には現在26の城跡が確認されている。この地も長宗我部氏によって平定されて以後、山内氏が高知に入城し、中世の終焉、近世の始まりとなる。なお、近世については今のところ対象を限定しており、今後の課題である。

註

- (1) 高知県教育委員会が事業主体となり、昭和61年度から10ヵ年計画で実施している県下一円の遺跡分布調査である。県下を5ブロックに分け、各ブロック2ヵ年を費やして実施するもので、平成4年3月末現在、幡多ブロック、香美・長岡ブロック、土佐・吾川ブロックの調査が終了しており、遺跡地図 ($S = 1 : 25,000$) と調査概報が各ブロックごとに刊行されている。
- (2) 平成3年3月に『早咲遺跡』として報告書が大方町教育委員会から発行されている。
- (3) 大方町は鯨ウォッキングでも有名で、この「鯨」と「らっきょう」とを掛け合せて「くじらっきょう」と命名したことである。

参考文献

- 『昭和61・62年度 高知県遺跡詳細分布調査概報 一幡多ブロッカー』高知県教育委員会
昭和63年3月
- 『大方町の中世城跡』大方町教育委員会 1190年3月
- 『早咲遺跡』大方町教育委員会 1991年3月
- 『大方町史』大方町教育委員会 1963年3月

第Ⅱ章 竹シマツ遺跡

1. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

竹シマツ遺跡は、昭和61年度に実施した高知県遺跡詳細分布調査の際発見された遺跡で、大方町のほぼ中央部、加持の平野部に面する丘陵先端に位置し、古代から中世にかけての遺物が散布していた。

調査は、高知県が昭和63年度に計画していた県道大用大方線の道路改良工事に伴うもので、大方町が高知県（中村土木事務所）の委託を受け、大方町教育委員会が調査主体となり実施した。調査は、まず試掘調査を行い、遺構が確認され次第発掘区を拡張する形をとった。調査期間は昭和63年9月26日から10月6日までの実働9日間であった。

(2) 調査日誌抄

1988年9月26～10月5日

9・26 本日から発掘調査を開始する。試掘トレンチの設定を行い、TR 1～3の調査を行う。

9・27 試掘トレンチTR 4～7の調査を行い、TR 3・4から遺構を検出する。

9・28 試掘トレンチTR 2の精査を行い、遺構を検出し、調査を実施する。

9・29 遺構が検出されたTR 3とTR 4を中心に可能な限り発掘区の拡張を行う。

9・30 拡張区の精査を行い住居址とみられる

遺構等を検出し、遺構検出状態の写真撮影を北側と南側から行う。

10・3 杭打ち並びに遺構の調査を開始する。

10・4 遺構の調査を行い、各遺構の写真撮影も行う。

10・5 遺構完掘状態の写真撮影を行い引きづき、遺構の平面実測を行う。

10・6 遺構のレベル実測を行い調査を完了する。



Fig. 3 竹シマツ遺跡周辺の地形図 (S = 1 : 5,000)

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

調査が道路改良工事に伴うものであったため、調査対象地も道路の幅員部分に限られるが、対象地が丘陵部分に所在することにより切り土部分も含め幅約40m、全長約80mが調査対象地となり、実質的な調査対象面積は約1,400m²であった。

調査はまず、現地形に合せ任意に試掘トレンチを7本（TR 1～7）設定して遺構の有無を確認した。試掘トレンチの規模は2×7mが2本、2×8mが4本、2×12mが1本であった。試掘調査の結果、TR 1～4から遺構が検出され、拡張可能なTR 3とTR 4を中心に可能な限り発掘区の拡張を行った。なお、基準軸は磁北をX軸としそれに直交する軸をY軸とし、任意座標を設定した。

発掘調査面積の内訳は、試掘調査が116m²、拡張区の面積が264m²であり、最終的な発掘調査面積は380m²であった。

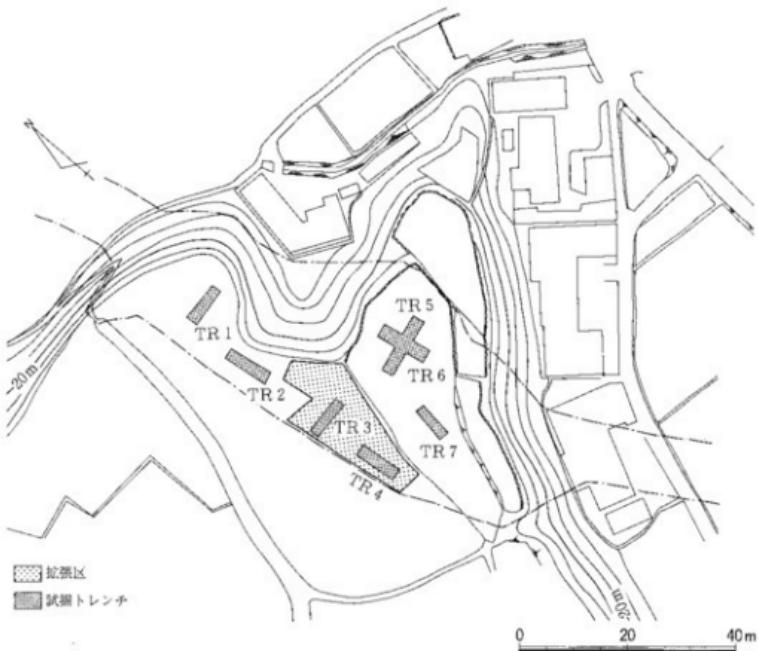


Fig. 4 調査区全体図及び発掘区設定図

(2) 調査の概要

遺跡が東西にのびる丘陵の先端部に立地していることから、調査区も西から東に向って緩やかに傾斜しており、現況では、西半分がタバコ畑、東半分が一段低くなった畠地を転用したミカン畑となっていた。このような状況から東半分はすでに削平されている可能性が強かった。

試掘トレンチは、西半分の畠地に4本、東半分のミカン畑に3本設定し、遺構が検出された南西部を中心に発掘区の拡張を行った。

調査の結果、堅穴住居址2棟、土坑2基、溝状遺構5条及びピット約40個を検出することができた。以下、試掘トレンチの概要、層序について記すことにする。

試掘トレンチ

TR 1～4は 2×8 mの東西及び南北トレンチで、調査区西半分の畠地に設定した。TR 2以外はすべて、表土層直下が地山となっており、その面が遺構検出面でもあった。TR 2は、丁度旧地形の谷部に当たり、地山が、北東方向に傾斜しており、その部分には土師器、土師質土器、青磁、備前焼の細片を含む2次堆積層が認められた。この2次堆積層は周囲にあった遺物包含層を含む土層を削った結果であると思われる。

TR 5は 2×12 mの東西トレンチ、TR 6・7は 2×7 mの南北トレンチで、調査区東半分のミカン畑に設定した。3本のトレンチともTR 1・3・4同様表土層直下が地山となっていたが、遺構は検出されなかった。これは畠造成の際に削平された結果ではなかろうか。

層序 (Fig. 5)

調査区において認められた基本層序は以下の通りである。

第I層 表土層

第II層 2次堆積層

第III層 黄色粘性砂礫土層

第I層は耕作土であり、第II層はTR 2で認められた土層で、2層に分層される。第III層は地山の自然堆積層で、遺構検出面となっている。

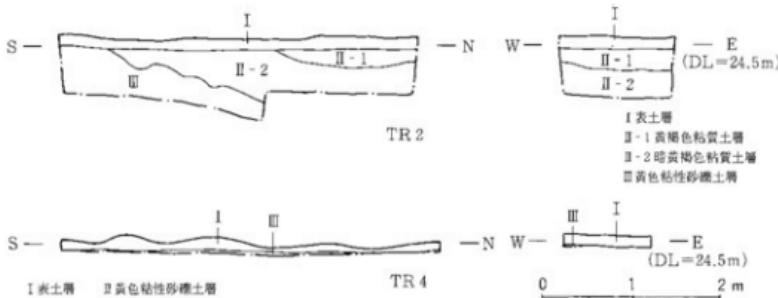


Fig. 5 試掘トレンチセクション図

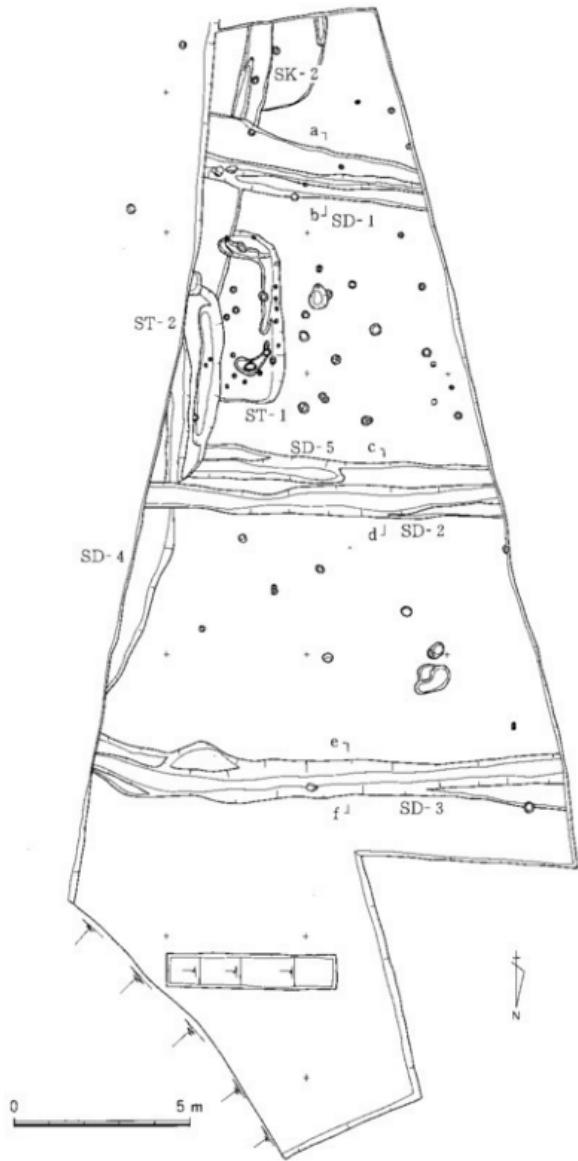


Fig. 6 拡張区造構平面図

3. 遺構と遺物

(1) 壊穴住居址

S T - 1 (Fig. 7)

S T - 1 は、調査区南部で検出した一辺約4.7mを測る方形の壊穴住居址である。しかし遺構の約3分の2はS T - 2 及びS D - 4 によって掘り込まれ、さらに煙の造成によって悉く削平されていた。長軸方向は、N - 2° - Wで、磁北に対しやや西に振った形となっており、東西に傾斜する地形に合せて壊穴を掘削したことが窺える。壁は比較的平坦な床面から緩やかに上がる箇所とやや角度を持って上がる箇所とがあるが、全般に遺存状況は不良で、壁高は15cm前後であった。床面の標高は25.154~25.189mを測る。埋土は暗褐色粘質土單一層であった。付属遺構として、壁溝、柱穴及び小ピットを検出した。壁溝は西と南の壁下に残存しており、その残存状況から元はコの字形に設けられていたのではないかとみられる。ピットは床面で12個検出されたが、概して小さく明確に主柱穴と言えるものは少ないので、P - 1 ~ 3 が主柱穴になり得るのではないかと推察される。規模は、P - 1 が径21cm、深さ32.6cm、P - 2 が径22cm、深さ5.2cm、P - 3 が長径32cm、短径23cm、深さ15.5cmであり、柱間距離はP - 1 ~ 2 間が1.6m、P - 2 ~ 3 間も1.6mを測る。他のピットは、P - 4 が深さ18.6cmと10cm以上を測る以外はすべて10cm未満でありかつ径が小さく主柱穴となり得ないとみられ、埋土的に明確な違いはなかったが、S T - 2 等に伴う掘り込みもあるのではなかろうか。また、西壁を中心に壁下地の小穴とみられるピットを検出した。類例が土佐国街跡の発掘調査の際に検出されている¹⁰⁾。出土遺物は皆無に近いが、たち上がりのある須恵器の細片が含まれる。

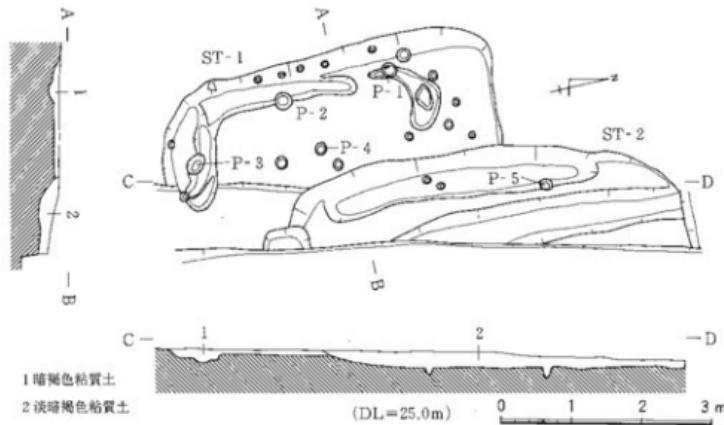


Fig. 7 S T - 1 + 2

S T - 2 (Fig. 7)

S T - 2 は、調査区南部、S T - 1 を切った形で検出した一辺約5.6mを測る方形の豊穴住居址である。遺構はS T - 1 を切って掘り込まれているが、S D - 2・4・5 に削削され、さらに烟の造成によってその大半が削平されていた。長軸方向は、N - 3° - E であるが、全体的にS T - 1 とはほぼ同じ方向を示す。壁は床面より緩やかに上がり、壁高は20cm前後である。床面の標高は24.931~25.019mを測る。埋土は、S T - 1 のそれとはほぼ同じであるがやや薄い。付属遺構は住居址の大半が削平されているため、壁溝と小ピット3個が検出できただけであった。壁溝は西壁沿で検出したやや幅の広いもの1条のみであった。P - 5 は径16cm、深さ15.3cmを測り柱穴となり得るがそれ以外のピットは極めて小さいもので、主柱穴と断定できるものは検出されなかった。出土遺物はS T - 1 同様皆無に近く、明確な時期の決め手となり得るものは出土していない。

(2) 土坑

S K - 1 (Fig. 8)

S K - 1 は調査区北部、T R - 1 の西端で検出した土坑である。平面形は円形で、径1.4m、深さ23cmを測る。断面形は逆台形状をなし、壁は平らな底面から垂直に近い角度で上がる。埋土は挙大の礫を含む灰白色粘質土單一層であった。出土遺物には、明治以降の陶磁器片や砥石の破片などがあるが、量は僅かであった。これらのことから判断すると、農作業に伴う貯蔵穴等ではなかろうか。

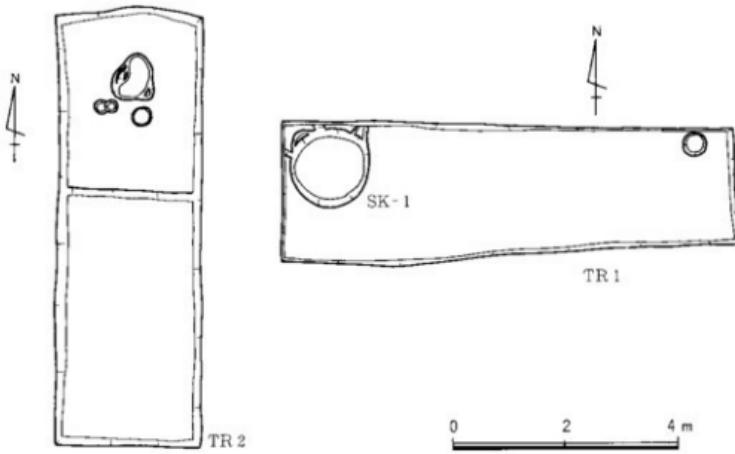


Fig. 8 TR - 1・2, SK - 1

SK-2

SK-2は調査区南端部で検出した土坑である。住居址の可能性もあるが、明確な付属遺構がなかったため土坑として扱った。平面形は一辺約3mを測る隅丸方形とみられるが、遺構が調査区以外へ延び、また、SD-4に掘削されているため全容は不明である。深さは3cmと浅く、壁は短く上がる。埋土はST-1と同じ暗褐色粘質土單一層であった。出土遺物は皆無であった。

(3) 溝状遺構

SD-1 (Fig. 9)

SD-1は調査区南部で検出した東西に延びる溝状遺構である。溝は、幅1.1~1.9m、深さ0.08~0.30m、検出長6.4mを測る。主軸方向はN-81°-Wであり、基底面は2°51' Eの傾斜度で東へ傾斜する。断面形は概ね舟底形を呈し、北側に一段高い平場を有す。埋土は暗灰色粘質土單一層であった。出土遺物には、瓦、備前焼擂鉢、土師質器の細片が少量あるが、図示できるものはなかった。

SD-2 (Fig. 9)

SD-2は調査区南部、SD-1の北約8.5mの所で検出した東西に延びる溝状遺構である。溝は、幅約1.4m、深さ0.1~0.35m、検出長10.0mを測る。主軸方向はN-88°-Wであり、基底面は2°41' Eの傾斜度で東へ傾斜する。断面形は概ね舟底形をなすが、北側と南側に一段高い平場を有する箇所もある。埋土は暗灰色粘質土單一層であった。出土遺物には、青磁、近世陶磁器の細片が数点あったのみで図示できるものはなかった。

SD-3 (Fig. 9)

SD-3は調査区中央部、SD-2の北約8.5mの所で検出した東西に延びる溝状遺構である。溝は、幅1.1~1.5m、深さ0.07~0.31m、検出長13.4mを測る。主軸方向はほぼ南北に直交しており、基底面は2°34' Eの傾斜度で東へ傾斜する。断面形は概ね舟底形を呈し、北側と南側に一段高くなつた平場を部分的に有す。埋土は暗灰色粘質土單一層であった。出土遺物に

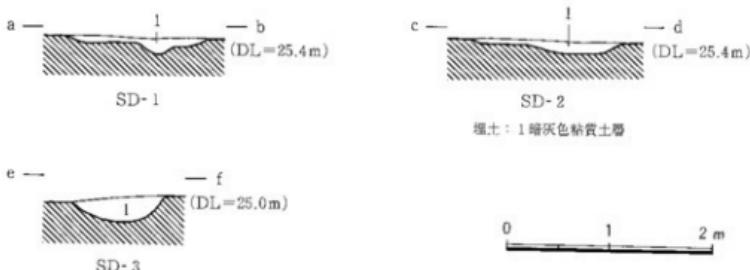


Fig. 9 SD-1 ~ 3 セクション図

は、青磁と近世陶磁器の細片が数点あったのみで図示できるものはなかった。

S D - 4

S D - 4 は調査区中央部、拡張区東端で検出した南北に延びる溝状遺構である。遺構は S T - 1・2、S K - 2 を掘削し、その約半分は烟の造成の際削平されている。溝は、幅0.9m以上、深さ0.04~0.15m、検出長19.7mを測る。主軸方向は N - 12° - E であり、基底面は 1° 50' N の傾斜度で北へ傾斜する。断面形はほぼ舟底形を呈す。埋土は暗灰色粘質土單一層であった。出土遺物には土錘と近代の陶磁器の細片があったのみで復元できるものはなかった。

S D - 5

S D - 5 は調査区南部、S D - 2 を切った形で検出した南北に延びる溝状遺構である。溝は、幅0.7~0.9m、深さ0.15~0.18m、検出長4.0mを測る。主軸方向は S D - 2 とはほぼ同じで、基底面は 1° 35' E の傾斜度で東へ傾斜する。断面形は舟底形を呈す。埋土は暗灰色粘質土で、出土遺物は皆無であった。

(4) その他の遺構と遺物

遺構の大半はピットであり、これらのいくつかは掘立柱建物に伴う柱穴ではないかとみられるが、建物跡を確認するには至らなかった。掘り方は、円形のものが多く、径0.1~1.0mを測る。埋土は、S T - 1 と同じ暗褐色粘質土を呈すものと S D - 1 などと同じ暗灰色粘質土を呈するものがあり、後者の比率が高かった。

出土遺物は大半がピットということもあって、極めて少なくかつ細片で図示できるものはなかった。

註

- (1) 大郎三郎ヤシキ地区の S T - 07 (『土佐国衙跡発掘調査報告書 第4集』高知県教育委員会 昭和58年3月)、堂々内地区の S T - 08~10 (『土佐国衙跡発掘調査報告書 第5集』高知県教育委員会 昭和59年3月)、一ノ坪地区の S T - 14 (『土佐国衙跡発掘調査報告書 第6集』高知県教育委員会 昭和61年3月) などに類例がある。なお、これらは6世紀後半から7世紀前半にかけてのものと推察される。

第Ⅲ章 宮崎遺跡

1. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

宮崎遺跡は、猿飼川災害関連工事中に支流との合流部分で土師器が発見されたことにより確認された遺跡である。発見された所が河川部分であったことなどから遺跡の縁辺部とみられ、遺跡の本体は猿飼川の東側、左岸に位置するものと考えられた。工事がさらに猿飼川の上流部分まで計画されていたため、急遽発掘調査を実施することとなった。

調査は、大方町が高知県（中村土木事務所）の依頼を受け、大方町教育委員会が調査主体となり実施した。調査は第1次調査（試掘調査）、第2次調査（本調査）に分けて実施された。調査期間は、第1次調査が昭和63年12月8日から12月10日までの3日間、第2次調査が平成元年3月6日から3月11日までの6日間で、合計実働9日間であった。

(2) 調査日誌抄

第1次調査 1988年12月8日～10日

12・8 試掘トレンチTR1～8の調査。

12・9 試掘トレンチTR9～18の調査。

12・10 TR1～5の遺物の取り上げ並びに

各トレンチの測量と写真撮影を行い終了する。

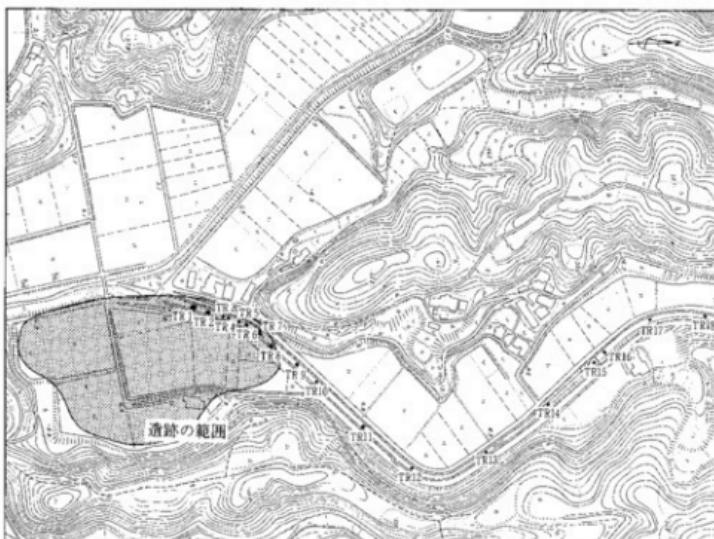


Fig. 10 宮崎遺跡周辺の地形図及び試掘トレンチ設定図 ($S = 1 : 5,000$)

第2次調査 1989年3月6日～3月11日

3・6 TR 1を中心/A区を設定し、調査したところ、土器の集中する地点を確認。

3・7 TR 5を中心にB区を設定し、調査したところ、A区同様土器の集中する地点を確認。

3・8 A・B区の調査を行う。

3・9 TR 7を中心にC区を設定し、調査を行う。

3・10 C区で 2×2 mの範囲に土器が集中する箇所を確認する。

3・11 各調査区の測量と写真撮影を行い調査を完了する。



Fig. 11 調査区全体図及び発掘区設定図

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

調査は河川の改良工事に伴うものであったため、幅15mで全長約800mの細長い部分が調査対象地となった。実質的な調査対象面積は約12,000m²であった。

調査は、まず、第1次調査として試掘トレンチ（2×2m）による確認調査を実施した。試掘トレンチは任意に下流から順に18ヶ所設定し、TR 1～18と呼称した。調査の結果、遺構は確認されなかったが、TR 1～8において9世紀後半とみられる遺物包含層を検出することができ、一部を拡張した。TR 9～18では遺構・遺物は全く検出されなかった。第2次調査は、遺物包含層が検出されたTR 1～8について、A～C区の調査区を設定し調査を実施した。

発掘調査面積の内訳は、第1次調査が113m²、第2次調査が745.35m²であり、最終的な発掘調査面積は858.35m²であった。

(2) 調査の概要

調査対象地が南北に細長いものであり、遺物の出土する可能性の高い部分が南部であったため、南部のTR 1～8までは試掘トレンチを約10m間隔で設定し、TR 9以降は山の裾部に当たるため比較的の間隔を空けて設定した。TR 1とTR 2からは比較的まとまって遺物が出土したため、第1次調査においても若干発掘区の拡張を行った。第2次調査では、遺物がまとまって出土したTR 1～8についてA～C区を設定して調査を実施した。

調査の結果、遺構は確認されなかったが、土師器を中心に黒色土器、須恵器、綠釉陶器、硯（転用硯）、墨書き土器、刻書き土器、製塙土器（布痕土器）等を含む遺物包含層を検出することができた。これらは東側に隣接する水田部分から流れ込んだものとみられ、その部分には官衙関連の遺構が存在するものと考えられる。以下、試掘トレンチ、各調査の概要及び層序について記すこととする。なお、遺物包含層から出土した遺物については次節で述べることとする。

試掘トレンチ

調査区南部のTR 1～8は遺物の出土が予想されたため、約10m間隔で設定した2×2mのトレンチであり、比較的まとまって出土したTR 1とTR 2は発掘区の拡張を行った。TR 9～18も2×2mのトレンチであるが、表土層の下層が青灰色粘質土層、緑灰色砂礫土層となっていたり、TR 1～8で認められた遺物包含層は確認されず、かつ遺構も検出されなかった。

調査区の概要

第2次調査において設定した調査区で、南からA～C区と呼称した。A区はTR 1とTR 2を中心とした幅8m、全長26.2mの調査区であり、第Ⅲ層黒灰色粘質土層が遺物包含層であった。B区はTR 3～6にかけて設定した幅8.5m、全長44.5mの調査区であり、第Ⅳ層黒灰色粘質土層が遺物包含層であった。C区はTR 7とTR 8を中心とした幅7m、全長22.5mの調査区であり、B区同様第Ⅳ層黒灰色粘質土層が遺物包含層であった。

層序

調査区A～C区において認められた基本層序は以下の通りである。

A区

- 第Ⅰ層 黄灰色粘質土層
- 第Ⅱ層 青灰色粘質土層
- 第Ⅲ層 黒灰色粘質土層
- 第Ⅳ層 緑灰色砂礫土層

B・C区

- 第Ⅰ層 黄灰色粘質土層
- 第Ⅱ層 稜混黄灰色粘質土層
- 第Ⅲ層 青灰色粘質土層
- 第Ⅳ層 黒灰色粘質土層
- 第Ⅴ層 緑灰色砂礫土層

この内、各区とも第Ⅰ層が表土層で現在の耕作土となっている。B・C区の第Ⅱ層も第Ⅰ層と色調が似ており、若干灘を含むが旧表土層とみることができる。

A区第Ⅱ層、B・C区第Ⅲ層とは同一層で若干の土器を含むことから2次堆積層とみられる。青灰色を呈するのは河川の影響により変色したものと考えられる。

A区第Ⅲ層、B・C区第Ⅳ層は前述のとおり遺物包含層であり、いく分砂を含んでいた。下層では自然木と絡み合った状態で遺物が出土しており、旧河川の影響を強く受けていることが窺える。また、遺物が何箇所かに集中して出土していることからもいえそうである。

A区第Ⅳ層、B・C区第Ⅴ層は地山の自然堆積層である。下層との境では涌水があり、砂と絡み合った遺物もみうけられ、川底の様相を呈していた。

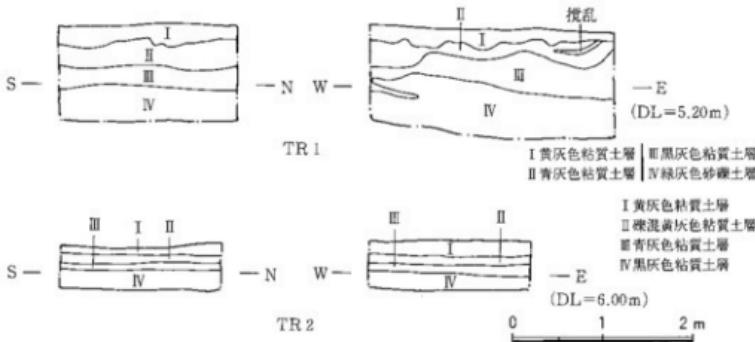


Fig. 12 試掘トレンチセクション図

3. 遺 物

今回の調査では遺構が検出されなかったので、遺物包含層から出土した遺物について本節での概略を記載することとする。なお、詳細については遺物観察表に譲ることとした。また、遺物については、土器、土製品、石製品の順に記す。

(1) 土器

遺物の中で、最も多くを占めるのが土器であり、全体の77%に当たる。中でも注目されるのは縁釉陶器を始めとして硯（転用硯）、墨書き土器、刻書き土器などの官衙関連遺物である。県下的にも出土例が少なくかつ限られた遺跡^①でしか発見されていない。また、県下では出土例の少ない製塙土器も注目されよう。以下、土師器、黒色土器、須恵器、縁釉陶器、硯、墨書き土器、刻書き土器、製塙土器（布痕土器）の順に記述していく。

土師器 (Fig.13, Fig.15~20-1~71)

器種には壺（1～39）、皿（40～55）、蓋（56）、鉢（57）、甕（58～71）がみられる。

まず、壺は底部の形態により以下の3類に分けることができる。

壺A 平底をなすもので、底部外面はすべて回転ヘラ切りであり、器高指数によりさらに3類に細分することができる。

壺A-1 器高指数が22前後のもので、口縁部は内湾気味ないし直線的に上がる体部から外傾してのびる。（1～3）

壺A-2 器高指数が30前後のもので、口縁部は外上方へほぼ直線的に上がる。6と7はロクロ目が残る。（4～8）

壺A-3 器高指数が35以上のもので、壺A-2同様口縁部は外上方へほぼ直線的に上がる。11は円盤状高台となる。（9～11）

12～21は口縁部が欠失するもので、体部が直線的に上がるもの（12～16）、内湾気味に上がるもの（17～21）がある。また、後者の中には底部が円盤状高台となるもの（19～21）がみられる。

壺B 底部外面に高台が付くもので、所謂付高台となるものであり、口径により大きく2類に分かれる。なお、底部外面はすべて回転ヘラ切りである。

壺B-1 口径が13cm未満のものである。（22）

壺B-2 口径が13cm以上と大型のものであり、塊と表現し得るものである。器高指数が30未満で底部が浅いもの（23・24）、器高指数が35以上で底部が深いもの（25～28）がある。なお、高台高は全般に低いが、27のように1cmを越えるものもみられる。

29～37は口縁部が欠失しているもので、残存部の形態からして、29が壺B-1類である以外は壺B-2類に属するとみられる。33は27と同じような高台が付く。37は極めて大きなもので、体部は外上方へ外反気味に上がり、一見鉢のような形態をなす。内面には横方向のヘラ磨きの後に円弧状にヘラ磨きを加える。外面にも横方向ないし斜め方向のヘラ磨きを施している。壺

の中では唯一ヘラ磨きが施されたものである。

皿C 底部が丸底をなすものである。口縁部は底部から内湾気味に上がる。(38・39)

皿も坏同様底部の形態により以下の3類に分けることができる。

皿A 平底をなすもので、底部外面はすべて回転ヘラ切りである。口縁部の形態及び器高指数によりさらに3類に細分される。

皿A-1 口縁部を内側に折り曲げようとした痕跡が残るものである。器面は回転ナデ調整を施し、42の内外面には部分的に横方向のヘラ磨きを加える。(40~42)

皿A-2 口縁部が斜め外上方へほぼ直ぐのびるものである。43と44の内外面には回転ナデ調整の後に横方向のヘラ磨きを部分的に加える。(43~45)

皿A-3 器高指数が前2者に比べやや高く17前後のもので、皿としては底部がやや深い感がある。口縁部は内湾気味に上がる体部からやや外傾してのびる。(46~48)

皿B 底部外面に高台(付高台)が付いたもので、口縁部の形態並びに高台の高さによって3類に細分される。

皿B-1 平らな底部に低い高台が付くものである。49の内外面にはヨコ方向のヘラ磨きが部分的に施される。(49)

皿B-2 平らな底部にハの字形に開く高い高台が付くものである。口縁部の形態は皿B-1とはほぼ同じである。(50)

皿B-3 口縁部が底部からそのまま斜め外上方へ緩やかに上がるもので、底部外面には比較的高い高台が付く。(51)

皿C 底部が丸底をなすものである。口縁部の形態によりさらに3類に分けることができる。

皿C-1 口縁部が体部から外傾するもの。(52)

皿C-2 口縁部が体部から僅かに外傾するもので、前者の形態化したものとみられる。(53・54)

皿C-3 口縁端部が若干内傾するもの。(55)

蓋は56の1点のみで、天井部外面中央に宝珠形のつまみが付く。(56)

鉢も57の1点のみで、口縁部は外上方へ内湾気味に上がる体部から外傾してのび、端部は丸く仕上げられる。(57)

壺は比較的多く出土しており、大きく2種類に分けることができる。

壺A 口縁部がぐの字形をなすもので、胴部は球体に近くなる。(58)

壺B 簡状をなす胴部に斜め外上方へ開く口縁部が付くもので、口径の大きさにより3類に分けることができる。

壺B-1 口径が20cm未満のもので、口縁端部を上方へ肥厚する。(59・60)

壺B-2 口径が24cm前後のもので、口縁端部を上方へ肥厚するもの(61・62・64・66・67)、肥厚しないもの(63)、下方へ肥厚するもの(68)及び外傾する口縁部の端部を丸く仕上

げるもの（65）がある。外面のハケ調整はタテ方向ないし斜め方向のものが多い。

甕B-3 口径が30cm以上のものである。71は口縁端部を上方へ肥厚する。（70・71）

黒色土器（Fig.20-72~78）

今回出土したのはすべて内面だけに炭素を吸着された、所謂内黒土器である。また、すべて破片で全体を知り得るものはなかった。72・73は甕の口縁部とみられる破片で、72は口唇部を除いて内面全面に横方向のヘラ磨きを施し、銀色に発色する。73は口縁部外面にもヨコ方向のヘラ磨きを加える。74も甕の口縁部の破片であるが、ヘラ磨きは認められなかった。75・76は甕の体部から底部にかけての破片で、75は内面全面、外面は部分的にヨコ方向のヘラ磨きを施す。76は内面にやや幅広のヘラ磨きをほぼ全面に、外面はヨコ方向のヘラ磨きを一部にそれぞれ施す。また、76の外面には煤の付着がみられる。77は甕の底部の破片で、底部外面には断面三角形の小さな高台が付く。ヘラ磨きは認められなかった。78は甕で、口縁部はくの字形をなし、端部は丸味を有す。内面はハケ調整の後にヨコ方向のヘラ磨き、口縁部外表面はヨコナデ調整、外面はナデ調整の後、部分的にヘラ磨きをそれぞれ施す。

須恵器（Fig.14, Fig.20-22-79-106）

土師器に次ぐ出土数で、器種には壺、蓋、皿、高壺、鉢、壺、甕がみられる。今回出土した須恵器は、東方約1kmにある鹿々場古窯跡で生産されたものと考えられる。

壺は、土師器の壺同様底部の形態により以下の3類に分けることができる。

壺A 平底をなすもので、底部外面はすべて回転ヘラ切りである。口縁部は外上方へほぼ真直ぐ上がる。（79・80）

壺B 底部外面に高台が付くもの（付高台）である。口縁部は外上方へほぼ真直ぐ上がる体部からそのままのびる。81の口縁部外面は強い回転ナデ調整を加えている。83~85は口縁部を欠損するが、82とほぼ同形態をなすものとみられる。（81~85）

壺C 底部が丸味をなすものである。口縁部は丸底の底部より内湾気味に上がる。（86）

蓋は6点あり、口径により2類に分けることができる。つまみは、宝珠形をなすもの、擬宝珠形をなすもの、真中がやや凹むボタン状をなすものとがある。

蓋A 口径が13cm前後のもので、壺Aに伴うものとみられる。天井部は平らで、口縁部は斜め下方に緩やかに下る。（87~89）

蓋B 口径が19cm前後のもので、壺Bに伴うものとみられる。天井部が丸味の残るもの、平らなものとがある。（90~92）

皿は底部の形態により2類に分けることができる。

皿A 平底をなすもので、口縁端部を内側に折り曲げている。95の内面には3本の火だしきがみられる。（93~95）

皿B 底部外面に高台が付くものである。96は低い高台、97は高い高台が付く。（96・97）

高壺は98の1点のみである。壺部は欠損するが、底部外面にはラッパ状に開く脚台が付く。

器面は摩耗が著しい。(98)

鉢も99の1点のみである。大型の鉢で、口縁部外面には1条の凹線を挟んで6本単位の波状文が3条施される。(99)

壺は6点が復元できた。100は短頸壺で、短く直立する口頭部が付く。101は細頸壺で、外上方へ外反する口頭部が付く。102も細頸壺とみられるが、口頭部が欠失する。造り、色調が104と似ており同一個体の可能性もある。103～105はすべて底部の破片で、104と105には高台が付く。(100～105)

壺は106の1点のみである。口頭部は直立した後大きく外反する。口縁部外面にはタタキの工具によるとみられる圧痕が施される。

緑釉陶器 (Fig.22-107～116)

県下の遺跡の中では珍しく比較的まとまって出土した。ただし、全体を知り得る資料は少なくかつ種の大半が剥落したものが目立った。器種には壺(107～113)と皿(114～116)がみられる。107・108は口縁部の破片で、端部は丸く仕上げられる。109は底部の破片で、体部は内湾気味に上がる。110は切り高台をもつ壺で、口縁部は内湾気味に上がる体部から小さく外反する。111～114は底部の破片で、111・112は蛇ノ目高台、113・114は切り高台である。115・116は皿で、切り高台(円盤状高台)となり、口縁部は斜め上方へ緩やかに上がり、端部は丸く仕上げられる。なお、高台の高さは115が3mm、116が8mmを測る。

硯(転用硯) (Fig.23-117～122)

すべて須恵器の壺の破片を利用した転用硯で、円面硯等の陶硯の出土はみられなかった。なお、実測図の中でドットの部分が墨跡で、ドットに濃淡があるのは墨跡の濃淡であり、濃い部分は濃いドットとしてある。117の内面(使用面)には指頭圧痕が部分的に残る。118・119の内面には同心円文のタタキ目が比較的良好に残る。120・121の内面にはタタキ目等は見られない。122は肩部の破片を利用して、頭の付根部分のカーブが残る。

墨書き土器 (Fig.24-123～127)

すべて土師器の壺Aに書かれたものである。123は底部外面に「□□」の墨書きがみられるが判読できない。124も底部外面に「□」の墨書きがみられるが判読できない。125は底部外面に「山三」状の墨書きがみられる。126は体部外面に下から「天」状の文字を書く。127は底部外面に「佐」の文字を書く。

刻書き土器 (Fig.24-128～131)

須恵器に施したもののが1点、製塙土器(布痕土器)に施したもののが3点である。後者は細片であること、似た刻書きである点などから1個体であった可能性もある。128は須恵器の高壺の底部外面に下から「玉」の文字をヘラ状工具で刻んでいる。129は布痕土器の体部外面に「□□」の文字を刻んでいるが判読できない。130も布痕土器の体部外面に「ホ」状の文字をヘラ状工具で刻む。131も布痕土器の体部外面にヘラ状工具で「早ホ」の文字を刻む。

製塙土器（布痕土器）(Fig.24-132・133)

2点とも口縁部の破片で、内面には布目が明瞭に残る布痕土器である。口縁部は外上方へ上がり、端部は内傾するやや丸味のある面をなす。外面には指頭圧痕が部分的に残る。

(2) 土製品

すべて土師質の管状土錘であり、全長3.0~8.2cm、重さ3.5~47.0gのものである。

土錘 (Fig.25-134~163, Tab. 3)

形態的には円筒形をなすものが圧倒的に多く、紡錘形に近いものも何点かみうけられるが、完全に鍊形と言いくれるものはなかった。また、長さに関わらず肉厚のものが多いのはこの時期の特徴であろう。これらは重さにより4グループに分けることができる。

土錘A 4~5gを中心とするグループであり、今回最も出土量が多かった。次の土錘Bとは6gを境としている。(134~143・146~151・156・157)

土錘B 7g前後を中心とするグループである。全長では土錘Aと差程違ひはみられなく、若干スケールアップしたものと考えられる。(144・152~154)

土錘C 10g前後を中心とするグループである。土錘Bに比べ、全長、重さとも一回り大きくなる。(145・155・158~160)

土錘D 30g以上のものである。前3グループとは明らかに異なり、用途または使用部位の違いによるものであろう。(161~163)

(3) 石製品

石硯とみられる破片1点と両面及び側面に敲打痕が残る叩石9点がある。

石硯 (Fig.25-164)

細粒砂岩を使用したもので、陸部と外堤とみられる部が残る。墨跡は残存しないが陸部は磨し滑らかである。

叩石 (Fig.25・26-165~173)

重量には差がみられるが、すべて手の平に乗る程度のものである。また、強弱の差はあるが両面及び側面に敲打痕が残る。173には煤の付着がみられる。

註

(1) 土佐国衙跡、野市町曾我遺跡、深瀬遺跡、中村市風指遺跡などでしか出土していない。

参考文献

『平城京発掘調査報告Ⅸ』 奈良国立文化財研究所 昭和57年

片桐 孝浩 「古代から中世にかけての土器様相—香川県における予察ー」『中近世土器の基礎研究 VI』 1990年12月

森 隆 「近江系縦軸陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌』第76巻

第4号 平成3年3月

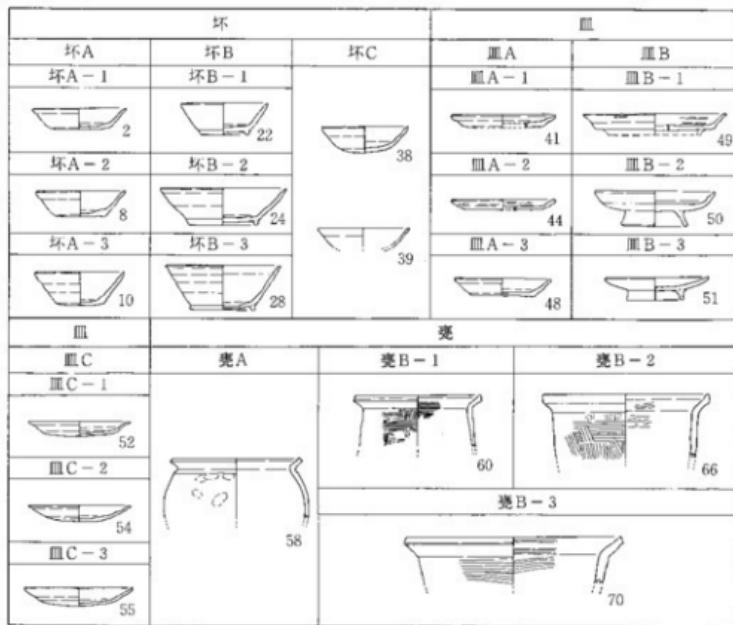


Fig. 13 土師器形態分類図 (V8)

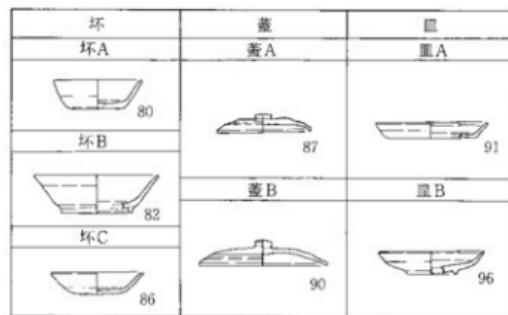
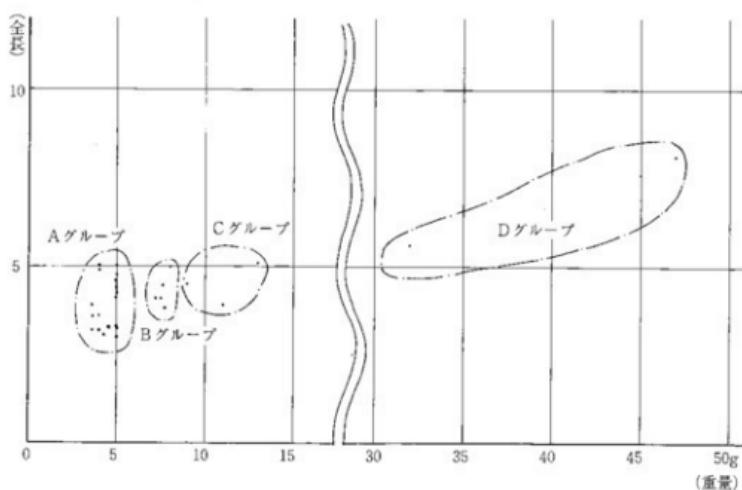


Fig. 14 須恵器形態分類図 (V8)

Tab.3 管状土鉢計測表



Tab.4 遺物観察表1 (土師器)

検査番号	調査区段	器種	法量 容積 (ml) 測定 直径	形態・文様	手法	備考
Fig.15 -1	C区 第Ⅱ層	土師器 壺	12.7 2.7 — 7.9	口縁部は内湾気味に上がる体部から外傾し、縁部は細く仕上げる。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナガ調整。	
* -2	*	*	13.6 3.0 — 8.4	口縁部は外方へほぼ直ぐのびる体部からやや外傾してのび、縁部は細く仕上げる。底部は平らである。	*	体部外面には既が付着する。
* -3	A区 第Ⅲ層	*	13.3 3.0 — 8.0	口縁部はやや内湾気味に上がる体部からやや外傾し、両端は丸い。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。底部内面はナガ調整。他は回転ナガ調整。	
* -4	B区 第Ⅱ層	*	12.8 3.6 — 7.4	口縁部は体部からそのまま直線的に上がり、縁部は細い。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナガ調整。	
*	-5	*	12.5 4.0 — 8.0	口縁部は体部から内湾気味に上がり、縁部は細い。底部は平らである。	*	
*	-6	A区 第Ⅱ層	13.2 3.6 — 5.6	口縁部は体部からそのまま斜め外上方へ上がり。両端は丸い。底部は小さく平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナガ調整。	
*	-7	*	12.8 3.6 — 6.8	*	*	6に比べ器壁が厚い。
*	-8	*	13.0 3.7 — 7.4	口縁部は内湾気味に上がる体部からやや外傾し、両端は丸い。底部は平らである。	*	外側から口縁部内面にかけて部分的に既が付着する。
*	-9	C区 第Ⅱ層	12.4 4.5 — 7.0	口縁部は体部からそのまま外上方へほぼ直ぐに上がり。両端は細い。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。底部内面はナガ調整。他は回転ナガ調整。	
*	-10	A区 第Ⅲ層	12.8 4.7 — 7.0	*	ロクロ成形。器面は摩耗しており測定不明。	
*	-11	*	15.0 6.1 — 7.5	口縁部は体部からそのまま外上方へほぼ直ぐに上がり。両端は丸い。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。他は回転ナガ調整。	
*	-12	*	— (1.5) — 7.0	体部は上は欠損する。底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナガ調整。	
*	-13	B区 第Ⅱ層	— (1.1) — 7.5	*	*	
*	-14	*	— (1.9) — 7.2	*	*	
*	-15	*	— (1.5) — 8.5	*	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切りで、板状圧痕が付く。他は回転ナガ調整。	

Tab.5 遺物観察表2 (土師器)

標識番号	調査区位	器種	法量 径高 側径 底径 (m)	形態・文様	手法	備考
Fig.15 -16	B区 第Ⅲ層	土師器 壺	— (2.6) — 10.0	体部以上は欠損する。 底部は平らである。	器面は摩耗が著しく調整は不明。	
* -17	A区 第Ⅲ層	*	— (2.5) — 7.0	口縁部は欠損する。体部は外上方を向く。 底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。内面は回転ナダ調整。	
Fig.16 -18	C区 第Ⅲ層	*	— (2.9) — 6.2	口縁部は欠損する。体部は内湾気味に上る。 底部は平らである。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は摩耗しており調整は不明。	
* -19	*	*	— (2.3) — 5.6	*	*	
* -20	A区 第Ⅲ層	*	— (3.2) — 6.8	*	*	
* -21	*	*	— (3.2) — 7.8	*	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナダ調整。	
* -22	B区 第Ⅲ層	*	12.6 4.6 — 6.8	口縁部は体部からそのまま外上方へ上がり、溝部は丸い。 底部は平らで、外縁部に高台が付く。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は摩耗しており調整は不明。	
* -23	C区 第Ⅲ層	*	17.4 (4.0) — 9.5	口縁部は内湾気味に上る体部から強く外反し、溝部は丸い。 底部は丸い。	ロクロ成形。口縁部外面から内面にかけて回転ナダ調整。体部外面は未調整。他は摩耗しており不明。	
* -24	B区 第Ⅲ層	*	18.2 5.4 — 10.0	口縁部は体部からそのまま外上方へ上がり、溝部は丸い。 底部は平らで、外縁部に逆台形状の高台が付く。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り後ナダ調整。他は回転ナダ調整。	
* -25	C区 第Ⅲ層	*	17.8 6.3 — 8.0	口縁部は体部から内湾気味に外上方へ上がり、溝部は丸い。 底部はやや丸味があり、外縁部にはハの字形に聞く高台が付く。溝部は外傾する逆面をなす。	*	
* -26	A区 第Ⅲ層	*	16.9 5.8 — 9.5	口縁部は内湾気味に上る体部から強く外反し、溝部は丸い。 底部はやや丸味を有し、外縁部にはハの字形に聞く高台が付く。	*	
* -27	*	*	17.0 6.0 — 10.0	口縁部は内湾気味に上る体部から強く外反し、溝部は丸い。 底部はほぼ平らで、外縁部には比較的高い高台が付く。	*	
* -28	C区 第Ⅲ層	*	16.8 6.4 — 9.5	口縁部は体部からそのまま外上方へ立ち上がり、溝部は強く外傾する。 底部はやや丸味を有し、外縁部にはハの字形の高台が付く。	*	
* -29	B区 第Ⅲ層	*	— (2.3) — 7.0	体部以上は欠損する。 底部は平らで、外縁部に真下を向く高台が付く。溝部は内傾する平面をなす。	*	
* -30	*	*	— (2.2) — 7.6	体部以上は欠損する。 底部は平らで、ハの字形に聞く比較的高い高台が付く。	ロクロ成形。器面は摩耗しており調整不明。	

Tab. 6 遺物観察表3 (土師器)

標本番号	調査区段	器種	口径 法量 (cm) 器高 肩径 底径 皮厚	形態・文様	手 法	備考
Fig.17 -31	C区 第IV層	土師器 环	— (2.5) — 9.0	口縁部は欠損する。体部は外上方を向く。 底部は平らで、外端部にはハの字形に開く高台が付く。	ロクロ成形。底部外側は回転ヘラ切り後ナダ調整。底部内面はナダ調整。他のは回転ナダ調整。	外側には煤が付着する。
* -32	B区 第IV層	* *	— (3.1) — 8.3	口縁部は欠損する。体部は内済氣味に上かる。 底部は平らで、外端部にハの字形の高台が付く。	*	
* -33	A区 第Ⅴ層	* *	— (2.6) — 9.0	口縁部は欠損する。体部は外上方を向く。 底部は平らで、外端部に真下に向く比較高い高台が付く。	*	
* -34	* *	* *	— (3.3) — 9.3	口縁部は欠損する。体部は外上方を向く。 底部は平らで、外端部にハの字形に開くしっかりした高台が付く。	*	
* -35	B区 第IV層	* *	— (4.2) — 9.6		*	体部外側に煤が付着。
* -36	A区 第Ⅴ層	* *	— (3.8) — 10.1	口縁部は欠損する。体部は外上方へほぼ直ぐのびる。 底部はほぼ平らで、外端部にハの字形に開く高台が付く。端部は内済する平頭をなす。	*	
* -37	B区 第IV層	* *	— (6.7) — 9.4	口縁部は欠損する。体部は外反気味に外上方へのびる。 底部は平らで、外端部にハの字形の高台が付く。	ロクロ成形。底部外側は丁寧なナダ調整。他のはナダ調整後に細いヘラ巻きを施す。	
* -38	A区 第Ⅴ層	* *	12.5 3.7 — 7.0	口縁部は体部から内済気味に上がり、端部は丸い。 底部は先端を有す。	ロクロ成形。底部外側は回転ヘラ切り。他のは回転ナダ調整。	
* -39	B区 第Ⅴ層	* *	12.8 (2.8) — —	口縁部は外上方へのび、底部は丸い。 底部は欠損する。	ロクロ成形。器底は回転ナダ調整。	ロ縁に煤が付着。
* -40	* *	* 皿	17.0 1.6 — 12.0	口縁部は頗る外上方にのびた体部から外傾し、わずかに内側に曲げる。 底部は丸い。 底部は平らで、やや中凹みとなる。	ロクロ成形。底部外側は回転ヘラ切り後ナダ調整。底部内面はナダ調整。他のは回転ナダ調整。	
* -41	C区 第IV層	* *	15.0 (1.9) — 11.1	口縁部は頗る外上方にのびた体部から外傾し、わずかに内側に曲げる。 底部は平らである。	*	
* -42	A区 第Ⅴ層	* *	14.6 1.9 — 10.5	口縁部は頗る外上方にのびた体部から外傾し、わずかに内側に曲げる。 底部は丸い。 底部は平らである。	ロクロ成形。底部外側は回転ヘラ切り後ヘラ巻きを施す。底部内面はナダ調整。他のは回転ナダ調整後部分的にヘラ巻きを施す。	
* -43	B区 第Ⅴ層	* *	15.4 1.8 — 10.5	口縁部は体部から外上方へそのままのびる。 底部は丸い。 底部は平らである。	ロクロ成形。底部外側は回転ヘラ切り後にナダ調整を施す。他のはナダ調整後部分的にヘラ巻きを施す。	
* -44	* *	* *	15.4 1.5 — 11.0		*	
* -45	* *	* *	15.6 2.0 — 10.3		ロクロ成形。器底は摩耗しており調整不明。	

Tab.7 遺物観察表4 (土師器)

標印番号	調査区位	器種	口径 器高 法量 (cc) 胸径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig.18 -46	A区 第Ⅱ層	土師器 皿	14.2 2.5 — 9.0	口縁部は内側弧形に上がる体部から外傾し、腹部は丸く仕上げる。 底部はいく分中凹みとなる。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り。他は回転ナガ調整。	
* -47	C区 第Ⅳ層	*	13.2 2.1 — 10.4	*	*	
* -48	A区 第Ⅲ層	*	14.3 2.5 — 9.4	*	*	
* -49	*	*	20.9 (2.7) — 13.5	口縁部は体部からそのまま外反気味に上り、縫部を細く仕上げる。 底部は平らで、逆ハの字形の高台が付く。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り後ナガ調整。底部内面はナガ調整。他は回転ナガ調整で部分的にヘラ巻きを施す。	
* -50	A区 第Ⅲ層	*	17.8 5.1 — 9.0	口縁部は体部からそのまま上方へのび、縫部は丸い。底部はやや丸味を有し、ハの字形に開く比較高台が付く。縫部は外傾する浅い凹面をなす。	ロクロ成形。器面は摩耗しており調整不明瞭。	
* -51	B区 第Ⅱ層	*	14.7 3.3 — 8.2	口縁部は底部から斜め上方へのび、縫部は丸い。 底部は丸味を有し、外表面にややハの字形に開く高台が付く。	ロクロ成形。底部外面は回転ヘラ切り後ナガ調整。他は回転ナガ調整。	
* -52	C区 第Ⅳ層	*	14.8 2.2 — 8.2	口縁部は斜め上方へのびる体部から大きく外傾し、縫部は細い。 底部は丸味を有す。	*	
* -53	A区 第Ⅲ層	*	14.8 2.0 — 8.7	口縁部は斜め上方へのびる体部からわざかに外傾し、縫部は細い。 底部は丸味を有す。	ロクロ成形。器面は摩耗しており調整不明瞭。	
* -54	*	*	15.0 2.3 — 7.8	*	*	
* -55	*	*	15.9 2.6 — 9.0	口縁部は体部から斜め上方へのび、縫部は小さく内側に曲がる。 底部は丸味を有す。	*	
* -56	B区 第Ⅱ層	*	(2.6) — 3.6	口縁部と天井部の大半が欠失する。 天井部は平らで、底盤部のつまみが付く。	ロクロ成形。天井部外面には回転ヘラ削り調整と回転ナガ調整を施す。	
* -57	A区 第Ⅲ層	*	19.2 (6.8) — —	口縁部は外方へのびた体部から外傾し、縫部は丸い。	ロクロ成形。口縁部から内面にかけて回転ナガ調整。他は未調整。	
Fig.19 -58	B区 第Ⅳ層	*	18.4 (8.8) 21.0 —	口縁部はくの字形に屈曲し、外上方へのび、縫部は内側する凹面をなす。 口縁部の内側に口縁を盛らす。胴部は丸い。	ロクロ部はヨコナガ調整。他はナガ調整。	口縁部外面に傷が付着する。
* -59	*	*	16.4 (10.3) 13.0 —	口縁部は胴部から外傾してのび、縫部は内側する平面をなす。 胴部は内下方へドス。	ロクロ部はヨコナガ調整。外面はタテ方向の低いハケ調整。内面はナガ調整を施す。	
* -60	*	*	17.8 (7.4) 16.5 —	口縁部は胴部から外傾してのび、縫部は内側する浅い凹面をなす。 胴部はほほ真下に下る。	ロクロ部はヨコナガ調整。頭部内面はヨコ方向のハケ調整。頭部外面にはタテ方向とヨコ方向のハケ調整を施す。	口縁部外面に傷が付着する。

Tab.8 遺物観察表5 (土師器、黒色土器)

件名番号	調査場	変更区分	器種	口径 法縫 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備考
Fig.19 -61	B区 第2層	土器 甕		22.6 (10.5) 31.1 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部は真横を向く浅い凹面をなす。 胴部はほぼ真下に下る。	口縁部はヨコナデ調整。胴部外 面はタケ目が残り、内面はナ デ調整を施す。	胴部外面には部分 的に様が付着する。
* -62	*	*	*	22.4 (6.0) 17.1 —	*	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には 斜め方向のハケ調整。内面には ナデ調整を施す。	
* -63	A区 第3層	*	*	23.2 (5.5) (19.1) —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部は内傾する浅い凹面をなす。 胴部は内下方へ下る。	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には タケ方向のハケ調整。内面には ナデ調整を施す。	
* -64	B区 第2層	*	*	23.0 (6.4) 24.0 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部は肥厚する。胴部は内傾する 凹面をなす。 胴部はほぼ真下に下る。	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には タケ方向のハケ調整。内面には ヨコ方向のナデ調整を施す。	
* -65	C区 第2層	*	*	23.0 (9.5) 19.8 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部は丸い。口縁部全体を肥厚す る。 胴部はほぼ真下に下る。	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には タケ方向のハケ調整。内面にはナ デ調整を施す。	口縁部外面には部 分的に様が付着す る。
* -66	B区 第2層	*	*	24.0 (9.3) 20.8 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部は真横を向く凸面をなす。 胴部は内下方へ下る。	胴部外面上にはタケとヨコ方向の ハケ調整。内面にはヨコ方向の ハケ調整を施す。他の摩耗して 調整不明感。	
* -67	C区 第2層	*	*	24.4 (6.8) 21.1 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部を上方に肥厚する。胴部は内 傾する凹面をなす。 胴部はほぼ真下に下る。	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には タケ方向のハケ調整。内面には ヨコ方向のハケ調整。	口縁部外面には様 が付着する。
* -68	*	*	*	24.8 (6.5) 21.6 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部を下方に肥厚する。胴部は内 傾する平面をなす。 胴部はほぼ真下に下る。	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には 斜め方向のハケ調整。内面にはナ デ調整を施す。	口縁部外面には若干 平塗が付着する。
* -69	A区 第3層	*	*	25.4 (5.3) (20.7) —	口縁部は胴部から大きく外傾して のび、腹部を上方に肥厚する。腰 部は真横を向く凹面をなす。 胴部は内下方へ下る。	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には 斜め方向のハケ調整。内面にはナ デ調整を施す。	
* -70	B区 第2層	*	*	30.4 (6.8) 26.0 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部は内傾する平面をなす。 胴部は内下方へ下る。	口縁部はヨコナデ調整。胴部外 面は振めていいハケ調整。内面 はヨコ方向の穂のハケ調整を施す。	口縁部外面には若干 平塗が付着する。
Fig.20 -71	*	*	*	39.0 (8.2) 35.5 —	口縁部は胴部から外傾してのび、 腹部を上方に肥厚する。腰部は真 横を向く凹面をなす。 胴部は内下方へ下る。	口縁部はヨコナデ調整で内面に はハケ目が残る。胴部外面上には タケとヨコ方向のハケ調整。内面 はナデ調整を施す。	
* -72	*	*	黑色土器 甕	— (4.3) —	口縁部は外上方へ立ち上がり、腰 部は細く仕上げる。	内面全面にヘラ磨きを施す。他 はナデ調整。	内面は黒色に染色 する。内黒土器。
* -73	*	*	*	— (4.5) —	*	内面全面と口縁部外面にヘラ磨 きを施す。他はナデ調整。	*
* -74	*	*	*	— (3.6) —	口縁部は外上方を向く体部から内 側気味に上がる。腰部は細く仕上 げる。	口縁部外面から内面にかけてヨ コナデ調整。他はナデ調整。	内黒土器。
* -75	C区 第2層	*	*	— (4.5) 10.0	口縁部は欠損する。体部は内滑気 味に上げる。 底盤は平らである。	内面は全面に、外表面は部分的に ヘラ磨きを施す。	*

Tab.9 遺物觀察表6（土師器、須惠器）

博回番号	調査区位	器種	法量 (cm)	口縁 最高 最低 底径	形態・文様	手法	備考
Fig.20 -76	A区 第Ⅴ層	黒色土器 壺	— (2.1) — 7.3	口縁部は欠損する。体部は内汚氣味に上がる。 底部は平らである。	内面はナゲ調整後へラ磨き。体部外面はナゲ調整後一部にヘラ磨き。底部外面はナゲ調整。		外底面に漬け付着する。内黒土器。
* -77	B区 第Ⅴ層	々 々	— (2.4) — 7.0	口縁部は欠損する。体部は外上方へ内汚氣味に上がる。 底部は平らで、外縁部に断面三角形の小さな高台が付く。	器蓋はナゲ調整。		内黒土器。
* -78	C区 第Ⅴ層	々 壺	11.0 (5.3) 11.8 —	口縁部は他の字形をなし、端部は内腹するやや丸味のある面をなす。 肩部は下方へ内汚氣味に下る。	口縁上部はヨコナゲ調整。内面はハケ調整後へラ磨き。外面はナゲ調整後部分的にヘラ磨きを施す。		*
* -79	B区 第Ⅴ層	頸壺器 壺	13.1 4.1 — 7.5	口縁部は体部からそのまま外上方へ立ち上がり、端部は丸く仕上げる。 底部はほぼ平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面は鋸歯へラ切り。他は回転ナゲ調整。		
* -80	A区 第Ⅴ層	々 々	13.0 4.2 — 8.0	— — —	*	*	
* -81	々 々	々 々	17.0 5.7 — 8.6	口縁部は底部からそのまま外上方へ立ち上がり、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、外縁部はハの字形の高台が付く。		*	外外面に火だしきがわずかにかかる。
* -82	々 々	々 々	18.4 5.5 — 10.4	口縁部は体部からそのまま外上方へ立ち上がり、端部は丸い。 底部はほぼ平らで、外縁部近くに端部が外傾する平面をなす高台が付く。		*	
* -83	B区 第Ⅴ層	々 々	— (4.5) — 10.4	口縁部は欠損する。体部は外上方へのびる。 底部は平らで、外縁部に断面逆台形の高台が付く。		*	
* -84	々 々	々 々	— (5.5) — 11.3	口縁部は欠損する。体部は外上方へのびる。 底部は平らで、外縁部にハの字形に開く高台が付く。		*	
Fig.21 -85	* * *	* * *	— (4.3) — 12.0	口縁部は欠損する。体部は外上方へのびる。 底部は平らで、外縁部に断面逆台形の高台が付く。		*	
* -86	* * *	* * *	— 13.4 3.2 — 8.0	口縁部は体部からそのまま内汚氣味に上がり、端部は丸く仕上げる。 底部は丸底を有す。		*	
* -87	* * *	々 々	13.8 2.6 — つまみ径 2.5	口縁部は斜め下外方へ下り、端部は下方へ屈曲する。 天井部は平らで、外縁中央に豪宝珠形のつまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面は摩耗しており調整不明。天井部内面はナゲ調整。他は回転ナゲ調整。		
* -88	* *	々 々	12.4 2.9 — つまみ径 2.6	口縁部は斜め下外方へ下り、端部は直線状で周囲をなす。 天井部は平らで、外縁中央にボタン状のつまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外縁外面は鋸歯ナゲ調整。内面はナゲ調整を施す。		
* -89	A区 第Ⅴ層	々 々	— (2.4) — つまみ径 2.4	口縁部は斜め下外方へ下る。 天井部はやや中凹みとなり、外縁中央に扁平なまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面はナゲ調整。他は回転ナゲ調整を施す。		
* -90	B区 第Ⅴ層	々 々	18.8 3.7 — つまみ径 2.2	口縁部は斜め下外方へ繋げてから下り、端部を下方へ小さく屈曲させ。 天井部はやや丸味を有し、外縁中央に宝珠形のまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口縁部は逆転ナゲ調型。他はナゲ調型。		

Tab. 10 遺物観察表 7 (須恵器)

標記番号	調査区分	器種	法量 （cm）	口徑 脇高 底径 底徑	形態・文様	手法	備考
Fig.21 -91	A区 第Ⅴ層	須恵器 蓋	— — — — — —	(1.9) — — — — — —	口縁部は欠損する。 天井部は平らで、外面部に擬宝珠形のつまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は摩耗しており調整不明瞭。	
* -92	B区 第Ⅳ層	* *	18.8 — — —	(1.4) — — —	口縁部は斜め下外方へ傾やかに下り、縫隙を若干屈曲さす。 天井部は中段みとなる。つまみは消失する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	
* -93	* *	* 皿	16.0 1.8 — —	(—) — — —	口縁部は近く外上方を向く体部から傾く外反し、縫隙を上方に屈曲さす。 底部はやや中凹みである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁は回転ヘラ切り後ナデ調整。底部内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
* -94	A区 第Ⅴ層	* *	16.2 — — —	(2.2) — — —	口縁部は近く外上方を向く体部から傾く外反し、縫隙を内方へ小さく屈曲さす。 底部はほぼ平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縁は回転ヘラ切り後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	
* -95	B区 第Ⅳ層	* *	17.0 2.0 — — —	(—) — — — —	口縁部は近く外反する体部から傾く外反し、縫隙は丸い。 底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面に大だすべきがある。	
* -96	* *	* *	15.6 3.3 — — — —	(—) — — — — —	口縁部は斜め上方にのび、内側に四脚を巡らす。縫隙は丸い。 底部は丸味を有し、断面造形の高台が付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は摩耗しており調整不明。	
* -97	* *	* *	— — — — — —	(—) — — — — —	体部は上が欠損する。 底部は平らで、ハの字形に近く比較的高い高台が付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
* -98	* *	* 高杯	— — — —	(7.4) — — —	脚部が残存する。 脚はハの字形に開き、器部で大きく開く。縫隙は下方へ屈曲する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は摩耗しており調整不明。	
* -99	* *	* 鉢	— — — — —	(37.0) (30.0) — — —	口縁部は外上方へのびる体部から内凹して立ち上がり、縫隙部を若干厚突する。外縁には凹痕で区切られた3箇の波状紋（各6本単位）を施す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 外縁は波文の前に回転カキ目調整を施す。他は回転ナデ調整。	
Fig.22 -100	* *	* 翌頭蓋	9.8 — — —	(3.1) (24.0) — — —	口縁部は近くほぼ直上を向き、縫隙部は丸い。 縫隙部は盛り、縫隙は下外方へ下る。 脚部の大半は欠失する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 器面は回転ナデ調整。	
* -101	A区 第Ⅴ層	* 細頭蓋	— — — — —	7.8 (8.6) (18.5) — —	口縁部は側部から屈曲し、外上方へ外反気味にのび、縫隙部は外傾する平面をなす。 脚部は緩やかに下る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部内面は回転ナデ調整。他はナデ調整。	脚部外面を中心で緑色の自然縫がかかる。
* -102	B区 第Ⅳ層	* *	— — — —	(10.0) (18.0) — —	口縫部は欠失する。 脚部は緩やかに下る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部内面は回転ナデ調整。他はナデ調整。	
* -103	C区 第Ⅳ層	* 蓋	— — — —	(10.2) — — —	中脚部以上は欠損する。 下脚部は外上方へ立ち上がる。 底部は平らである。	脚部外縁はタクキの後ナデ調整。 底部外縁はナデ調整。内面は横方向の指ナデの後にナデ調整。	
* -104	* *	* 台付竈	— — — —	(7.4) — — —	中脚部以上は欠損する。 下脚部は外上方へのびる。 底部は平らで、外縫隙に小さな高台が付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外縫隙はナデ調整。他は回転ナデ調整。	器形には歪みがみられる。
* -105	A区 第Ⅴ層	* *	— — — —	(5.4) — — —	中脚部以上は欠損する。 下脚部は外上方へのびる。 底部は平らで、外縫隙に小さな高台が付く。	器面はナデ調整。	

Tab.11 遺物観察表8 (須恵器、綠釉陶器、鏡)

辨別番号	調査区位	器種	口径 器高 柄径 (cm)	形態・文様	手法	備考
Fig.22 -106	C区 第Ⅳ層	須恵器 壺	36.0 (11.5) (47.0) —	口縁部は直立する頭部から大きく外反し、腹部は直線を向く凸面をもつ。頭部は鍍金や合にによる。腹部外面にはタクキの工具で圧痕を加える。	口縁部は灰板ナダ調整。腹部外面は格子目(タクキ目)、内面は青海波文が残存する。	
* -107	*	綠釉陶器 壺	— (1.7) — —	口縁部は外上方へのび、底部は丸い。	濃緑色釉を施釉するが、剥落が目立つ。	
* -108	B区 第Ⅳ層	*	— (1.9) —	*	*	
* -109	C区 第Ⅴ層	*	— (1.8) — 6.0	口縁部は欠損する。体部は内肉気味に上がる。 底部は平らである。	釉は剥落が目立つ。底部外面は回転ヘラ削り後ナダ調整。	
* -110	*	*	12.6 4.8 6.4	口縁部は内肉気味に上がる体部から小さく外反し、腹部は丸い。 底部は平らで切り高台である。	*	
* -111	A区 第Ⅲ層	*	— (1.6) — 7.8	口縁部は欠損する。 体部は内肉気味に上がる。 底部は鉢ノ目高台である。	濃緑色釉を施釉するが、剥落が目立つ。	
* -112	C区 第Ⅳ層	*	— (1.9) — 7.0	*	*	
* -113	A区 第Ⅲ層	*	— (1.8) — 5.9	口縁部は欠損する。 体部は内肉気味に上がる。 底部は切り高台である。	全面に濃緑色釉を施釉する。	
* -114	B区 第Ⅳ層	*	— (1.5) — 6.0	*	濃緑色釉を施釉するが、剥落が目立つ。	
* -115	*	*	13.4 2.5 6.3	口縁部は体部からそのまま斜め上方へ上がり、腹部は細い。 底部は切り高台である。	*	
* -116	A区 第Ⅲ層	*	14.0 2.8 6.0	*	釉の大半は剥落する。	***
Fig.23 -117	*	鏡 (軸用鏡)	全長 全幅 全厚 (10.0) (7.8) 1.3	須恵器の壺片を鏡に軸用したものである。	外面には格子目(タクキ目)が残る。	
* -118	B区 第Ⅳ層	*	全長 全幅 全厚 (13.5) (9.0) 0.9	*	内面には同心円文のタクキ目が残る。外面には格子目(タクキ)の後にハケ調整を施す。	墨跡には濃い部分と薄い部分がある。
* -119	A区 第Ⅳ層	*	全長 全幅 全厚 (13.2) (6.1) 1.3	*	*	
* -120	*	*	全長 全幅 全厚 (13.7) (12.6) 1.8	*	内面には同心円文のタクキ目がわずかに残る。外面には平行のタクキ目が残る。	墨跡には濃い部分と薄い部分がある。
* -121	*	*	全長 全幅 全厚 (13.5) (9.3) 0.6	*	外面上には平行のタクキ目が残る。	

Tab.12 遺物観察表9(甕, 磨色土器, 刻畫土器, 製塙土器, 土錐)

博物番号	調査区分	器種	法量 (cm) 口径 器高 側径 底径	形態・文様	手法	備考
Fig.23 -122	A区 第Ⅲ層	甕 (軸用甕)	全長 全幅 全厚 (16.4) (8.5) 0.8	頸器の裏片を鏡に転用したものである。	外圍にはタテ方向のタキの後に回転カギ目調整を行う。	
Fig.24 -123	+	磨色土器 (土器)	— (1.0) — 9.4	坏で、体部以上は欠損する。 底部は平らで、外底面に「□□」の墨書きがあるが、判読できない。	底部外圍は回転ヘア切り。他は回転ナデ調整。	
+	+	+	— (1.1) — 7.0	坏で、体部以上は欠損する。 底部はほぼ平らで、外底面に「□」の墨書きがあるが、判読できない。	*	
+	+	+	— (2.3) — 7.5	坏で、口縁部は欠損する。体部は外上方へのびる。 底部は平らで、外底面に「山三」?の墨書きがある。	*	
+	C区 第Ⅳ層	+	12.3 3.8 — 7.9	坏で、口縁部は内湾気味に上がる。 体部からそのまま上がり、底部は丸い。 底部は平らである。 体部外圍に「天」?の墨書きがある。	*	*
+	A区 第Ⅲ層	+	— (2.3) — 8.4	坏で、口縁部は欠損する。体部は斜め上方へのびる。 底部は平らで、外底面に「往」の墨書きがある。	底部外圍は回転ヘア切り。底部はナデ調整。他は回転ナデ調整。	
+	B区 第Ⅲ層	刻畫土器 (腹底器)	— (3.8) — 5.5	高杯で、底部の口縁部と腹底が欠損する。 底部外圍に「玉」の墨書きがある。	器型は回転ナデ調整。	
+	+	+(製造土器)	— (3.0) — —	布底土器で、体部の破片である。 外底面に「□□」の墨書きがあるが、判読できない。	外圍はナデ調整を施す。内面は布底が残る。	
+	+	+	— (3.5) — —	布底土器で、体部の裏片である。 外底面に「ホ」の墨書きがある。	*	
+	+	+	— (11.5) — —	布底土器で、体部の腹片である。 外底面に「早ホ」の墨書きがある。	*	
+	+	製塙土器 (布底土器)	— (5.5) — —	口縁部は外上方へのび、底部は内傾する平底をなす。体部以下は欠損する。	*	
+	+	+	20.0 (8.5) —	*	*	
Fig.25 -134	A区 第Ⅲ層	土錐	全長 全幅 重量(g) 3.0 1.6 5.0	土錐質の土錐で、やや筋鉄形を呈す。孔径は0.5cmである。	表面はナデ調整で指壓压痕が部分的に残る。	
+	+	+	全長 全幅 重量(g) 3.3 1.8 (2.5)	土錐質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。孔径は0.6cmである。	*	
+	C区 第Ⅳ層	+	全長 全幅 重量(g) 3.3 1.3 4.0	土錐質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。孔径は0.5cmである。	*	
+	B区 第Ⅲ層	+	全長 全幅 重量(g) 3.1 1.2 4.3	土錐質の土錐で、円筒形を呈す。孔径は0.4cmである。	*	

Tab.13 遺物観察表10(土錐)

採取番号	調査区位	器種	計測値 (cm, g)	全長 全幅 重量	形態・文様	手法	備考
Fig.25 -138	B区 第Ⅳ層	土錐		3.3 1.4 4.5	土師質の土錐で、円筒形を呈す。 孔径は0.6cmである。	表面はナメ調整で指痕圧痕が部分的に残る。	
*	*	*		3.3 1.4 5.0	土師質の土錐で、円筒形を呈す。 孔径は0.5cmである。	*	
*	*	*		3.3 1.3 5.0	*	*	
*	*	*		3.6 1.3 3.5	*	*	
*	*	*		3.6 1.4 4.0	土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.5cmである。	*	
*	A区 第Ⅲ層	*		3.9 1.3 (2.5)	土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.5cmである。	*	
*	B区 第Ⅳ層	*		3.8 1.7 (7.0)	土師質の土錐で、円筒形を呈す。 孔径は0.6cmである。	*	
*	*	*		3.8 1.9 11.0	*	*	
*	*	*		4.3 1.4 5.0	*	*	
*	*	*		4.8 1.2 4.0	土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.5cmである。	*	
*	A区 第Ⅲ層	*		4.6 1.5 5.0	土師質の土錐で、やや紡錘形を呈す。 孔径は0.6cmである。	*	
*	B区 第Ⅳ層	*		4.7 1.4 5.0	土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.4cmである。	*	
*	*	*		4.3 1.4 5.0	土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.5cmである。	*	
*	*	*		4.1 1.3 5.0	*	*	
*	C区 第Ⅳ層	*		4.2 1.4 7.1	土師質の土錐で、やや紡錘形を呈す。 孔径は0.4cmである。	*	
*	A区 第Ⅲ層	*		(4.4) 1.7 (6.0)	土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.6cmである。	*	
*	*	*		(4.1) 1.8 (7.5)	土師質の土錐で、ほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.7cmである。	*	
*	B区 第Ⅳ層	*		4.5 1.8 9.0	*	*	
*	*	*		5.0 1.3 4.0	土師質の土錐で、細長くほぼ円筒形を呈す。 孔径は0.5cmである。	*	

Tab. 14 遺物観察表11(土鍤, 石硯, 叩石)

博岡番号	調査区分	器種	計測値 (cm, g)	全長 全幅 全厚 重量	形態・文様	手法	備考
Fig.25 -157	B区 第IV層	土鍤		5.0 1.5 5.0	土師質の土鍤で、ほぼ円筒形を呈す。孔径は0.4cmである。		表面はナメ調整で指揮圧痕が部分的に残る。
*	-158	*	*	(4.8) 1.8 (8.0)	土師質の土鍤で、やや結接形を呈す。孔径は0.7cmである。	*	
*	-159	*	*	(4.8) 1.8 (10.0)	土師質の土鍤で、円筒形を呈す。孔径は0.6cmである。	*	
*	-160	*	*	5.1 1.8 13.0	土師質の土鍤で、やや結接形を呈す。孔径は0.5cmである。	*	
*	-161	A区 第Ⅲ層	*	5.6 2.7 32.0	土師質の土鍤で、やや結接形を呈す。孔径は扁平な形をしており孔径1.0cm、底径0.7cmである。	*	
*	-162	*	*	7.6 3.0 45.0	土師質の土鍤で、幼獣形を呈す。孔径は0.7cmである。	*	
*	-163	*	*	8.2 2.6 47.0	土師質の土鍤で、細長い円筒形を呈す。孔径は0.8cmである。	*	
*	-164	B区 第V層	石硯	全長 全幅 全厚	(5.5) (5.9) 0.9	陳列部の一部が残存する。陳列部には小さな外塊がある。	石材は繊粒砂岩。
*	-165	A区 第Ⅲ層	叩石	全長 全幅 全厚 重量(g)	7.7 6.9 3.3 260.0	中粒砂岩で、川原石を使用する。両面に深い敲打痕が残る。	
Fig.26	B区 第IV層	*	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	(5.7) (5.9) 4.2 (255.0)	中粒砂岩で、川原石を使用する。両面と側面にそれぞれ敲打痕が残る。	
*	-166	A区 第Ⅲ層	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	8.6 8.1 3.2 (330.0)	中粒砂岩で、川原石を使用する。両面と側面にそれぞれ敲打痕が残る。	
*	-167	*	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	12.5 8.5 3.3 540.0	粗粒砂岩で、川原石を使用する。両面と側面にそれぞれ深い敲打痕が残る。	
*	-168	*	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	10.9 9.4 3.6 580.0	中粒砂岩で、川原石を使用する。両面と側面に比較的浅い敲打痕が残る。	
*	-169	B区 第V層	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	11.9 7.9 4.5 630.0		
*	-170	*	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	10.7 9.8 4.0 630.0		
*	-171	A区 第Ⅲ層	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	13.0 11.0 5.4 1,120.0	中粒砂岩で、川原石を使用する。両面と側面にそれぞれ深い敲打痕が残る。	
*	-172	*	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	14.1 11.5 5.3 1,160.0	粗粒砂岩で、川原石を使用する。両面と側面に深い敲打痕が残る。	
*	-173	*	*	全長 全幅 全厚 重量(g)	14.1 11.5 5.3 1,160.0	粗粒砂岩で、川原石を使用する。両面と側面に深い敲打痕が残る。	一緒に揮の付着がみられる。

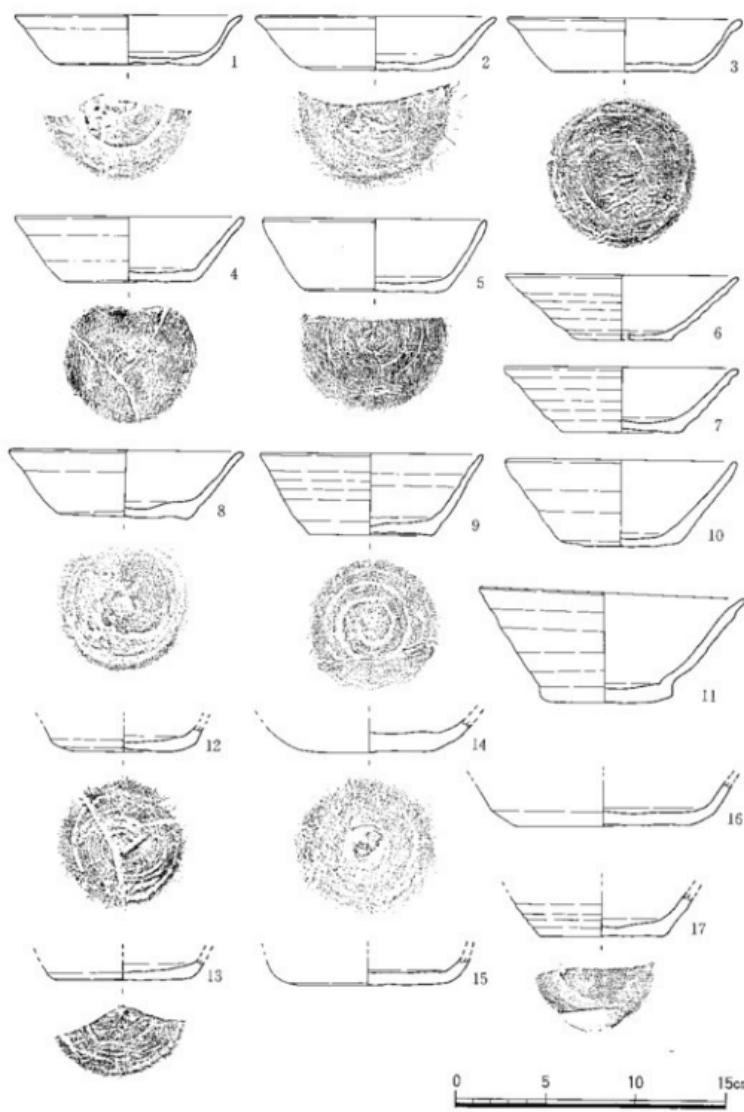


Fig. 15 漢物実測図 1 (土師器)

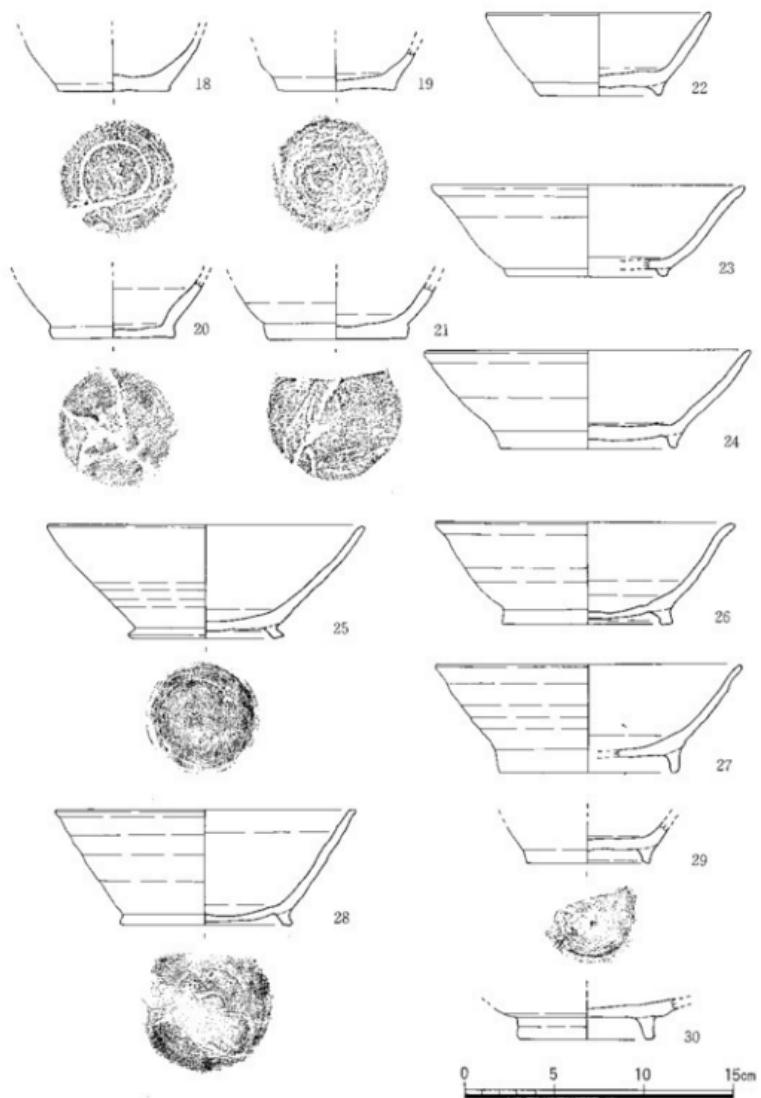


Fig. 16 遺物実測図 2 (土器)

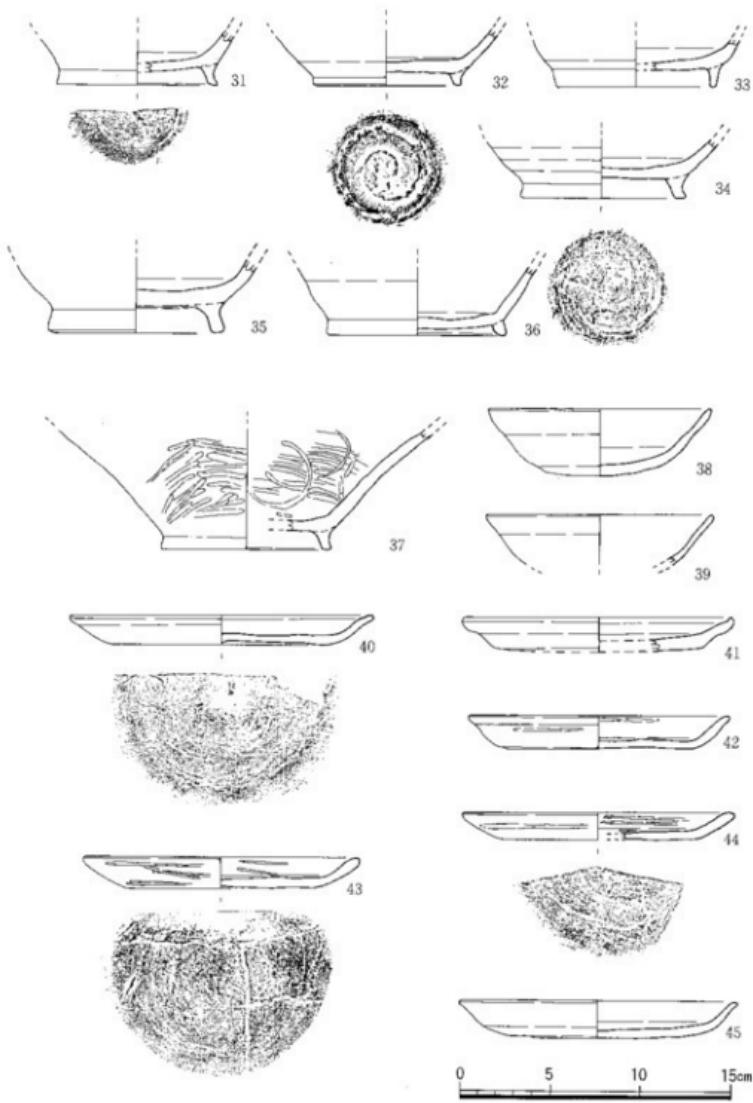


Fig. 17 遺物実測図 3 (土師器)

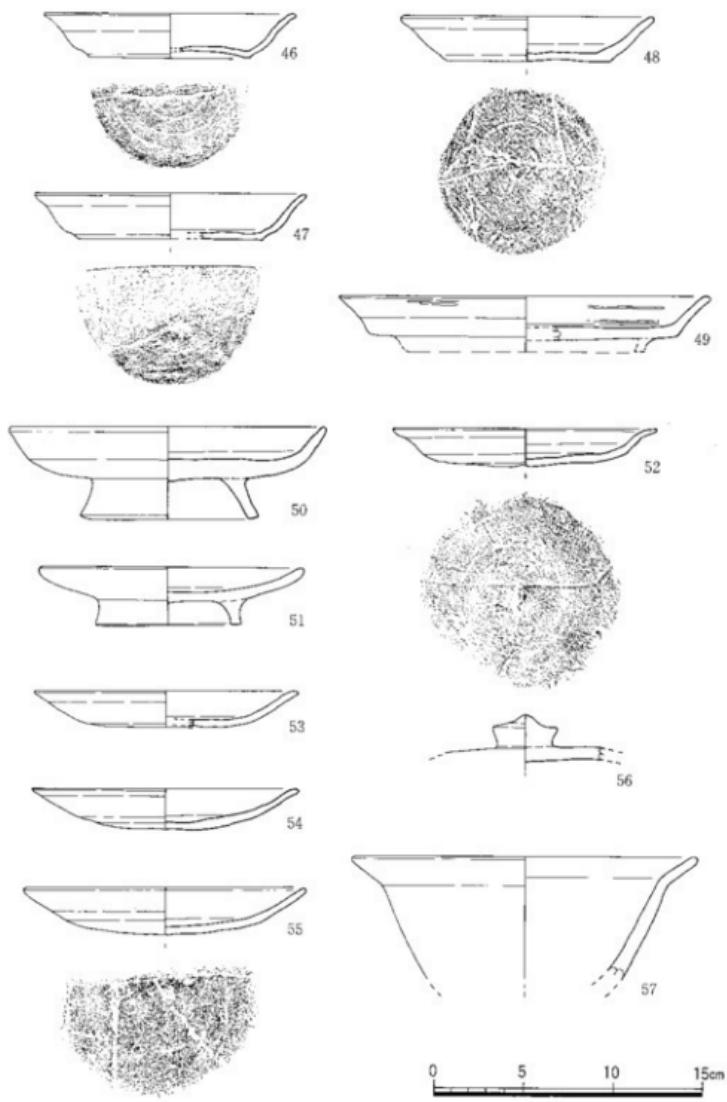


Fig. 18 遺物実測図 4 (土器)

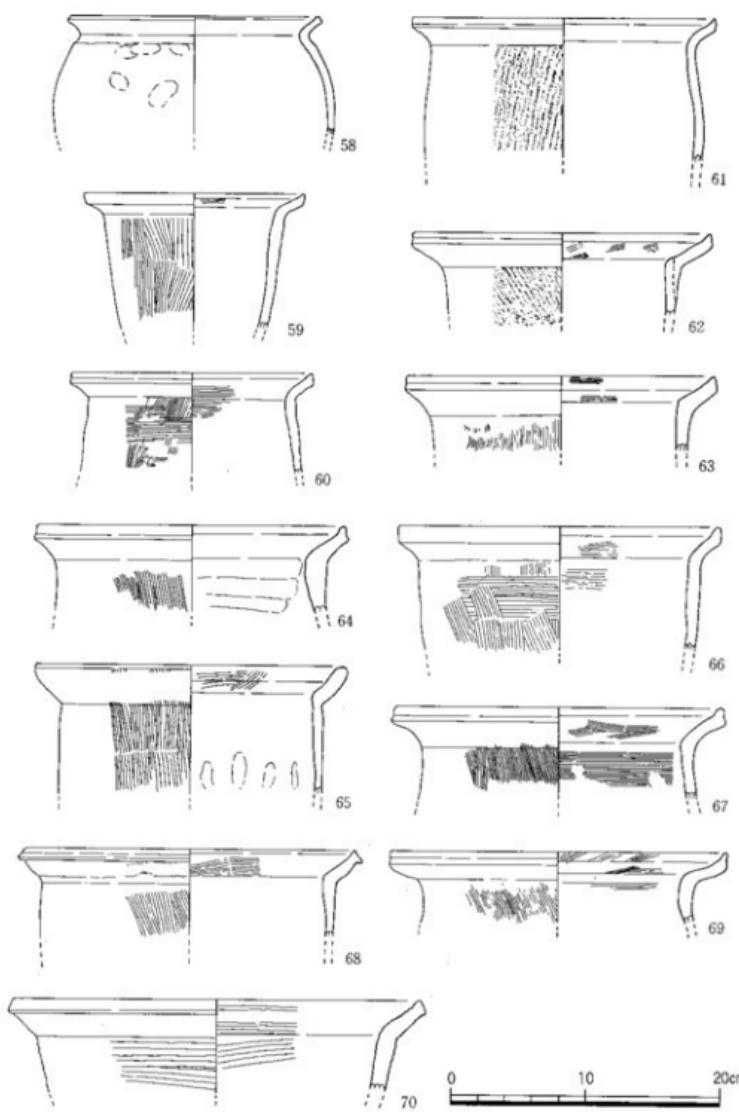


Fig. 19 遺物実測図 5 (土器)

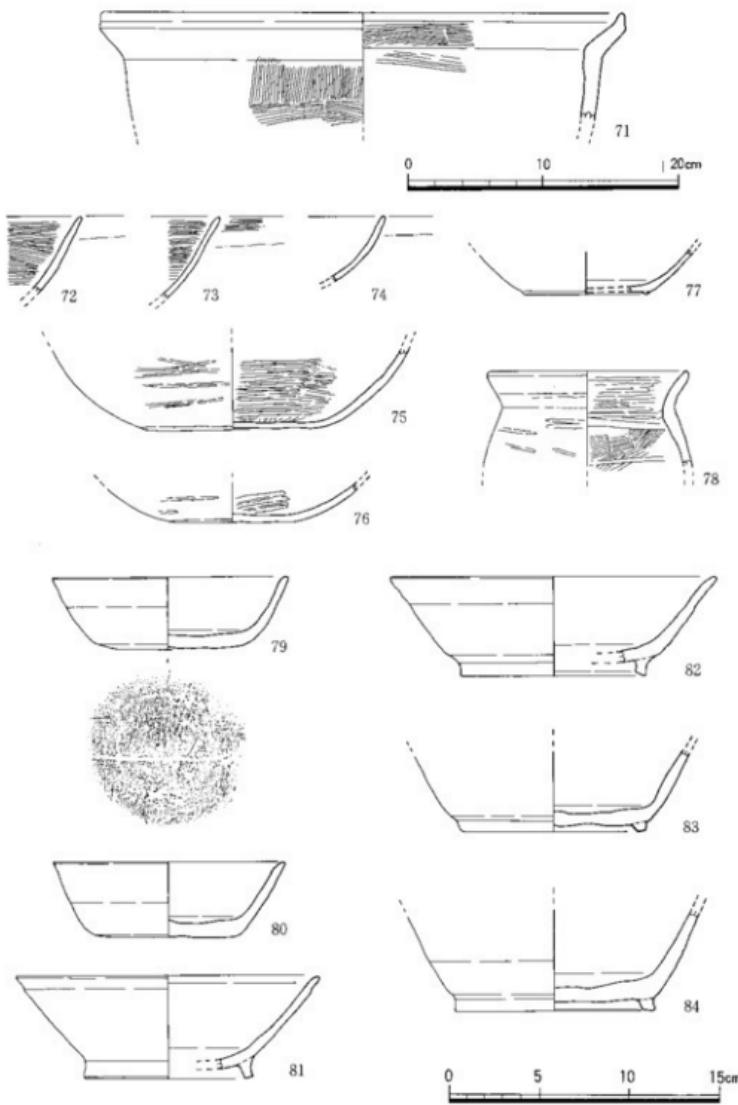


Fig. 20 遺物実測図 6 (土器類, 黒色土器, 須恵器)

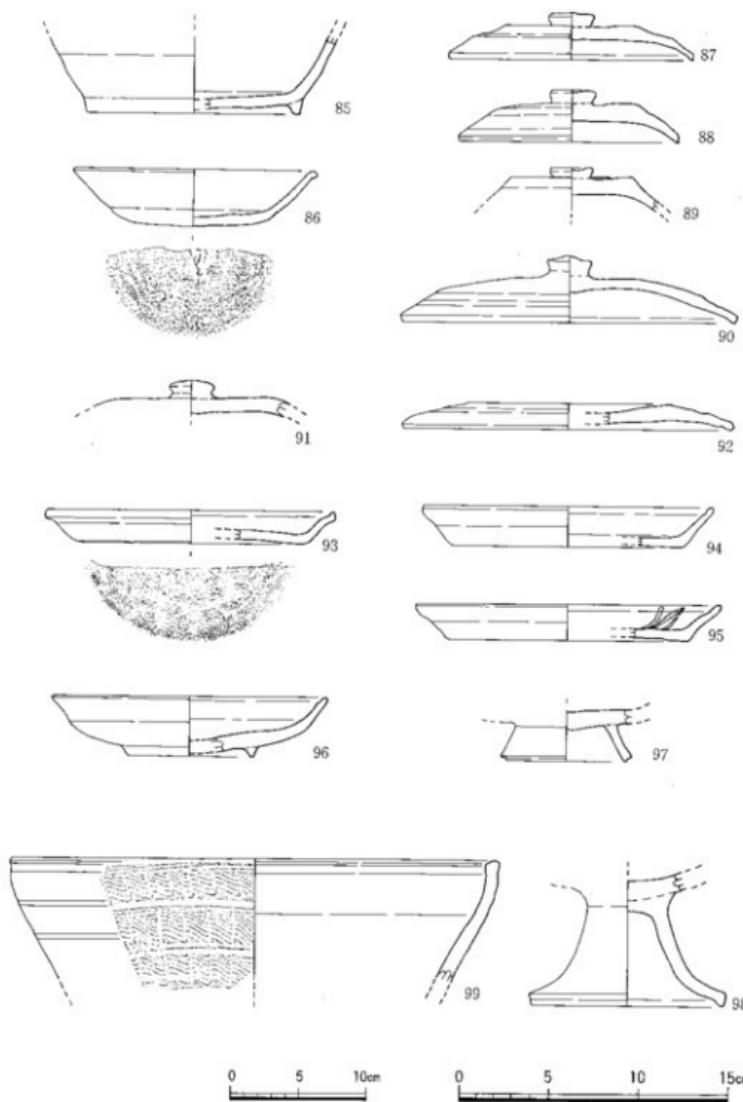


Fig. 21 遺物実測図 7 (須恵器)

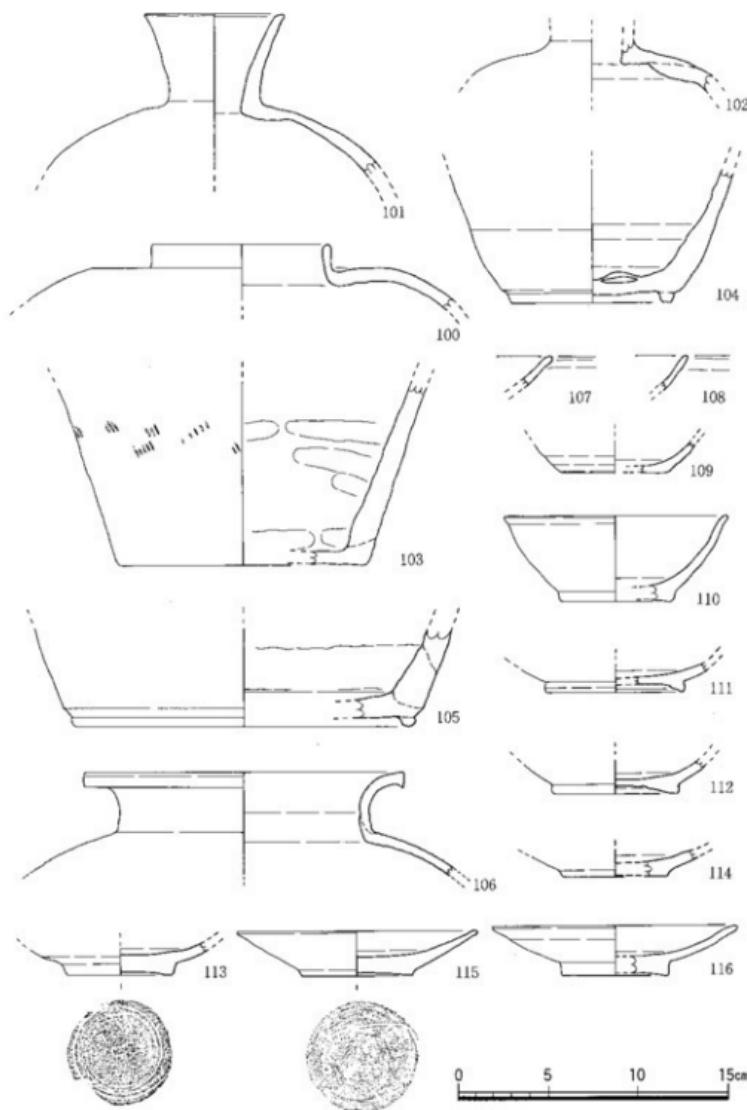


Fig. 22 遺物実測図 8 (須恵器、緑釉陶器)

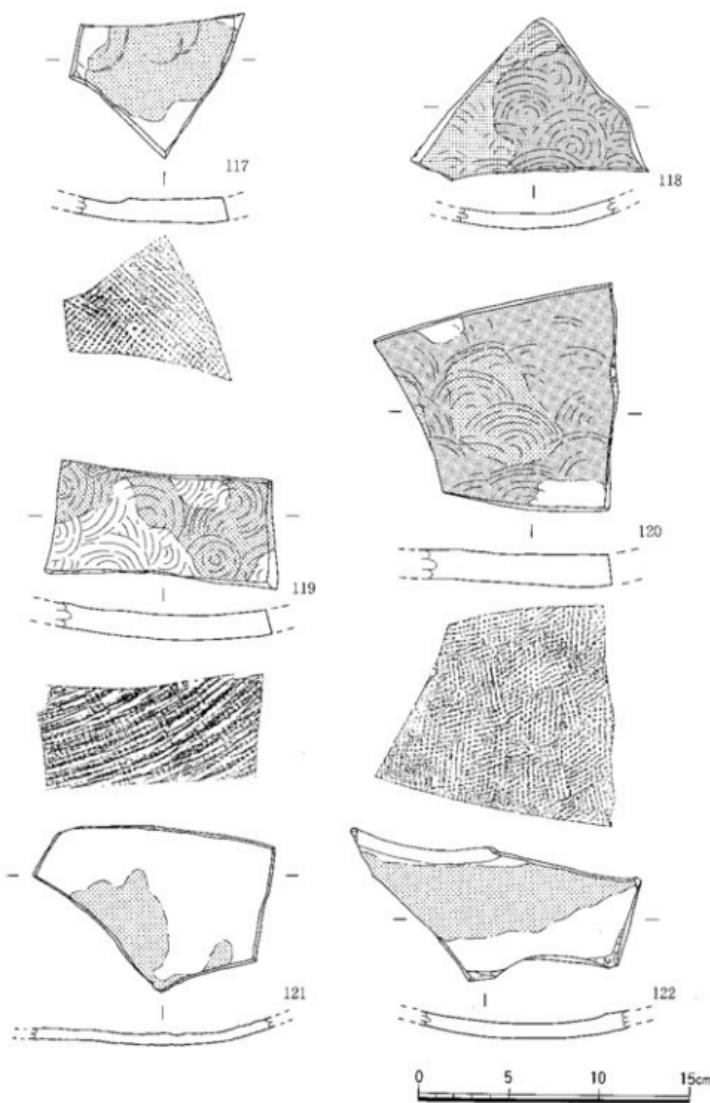


Fig. 23 遺物実測図 9 (硯一軒用硯一)

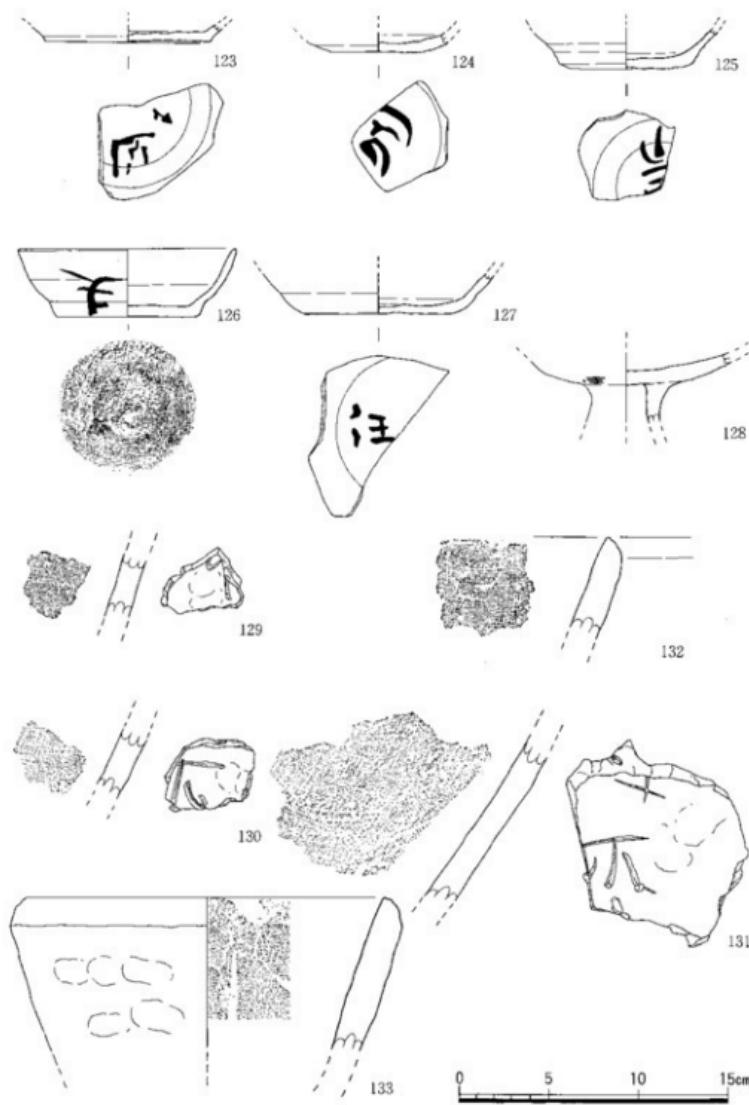


Fig. 24 遺物実測図10 (黒色土器, 刻畫土器, 製塩土器)

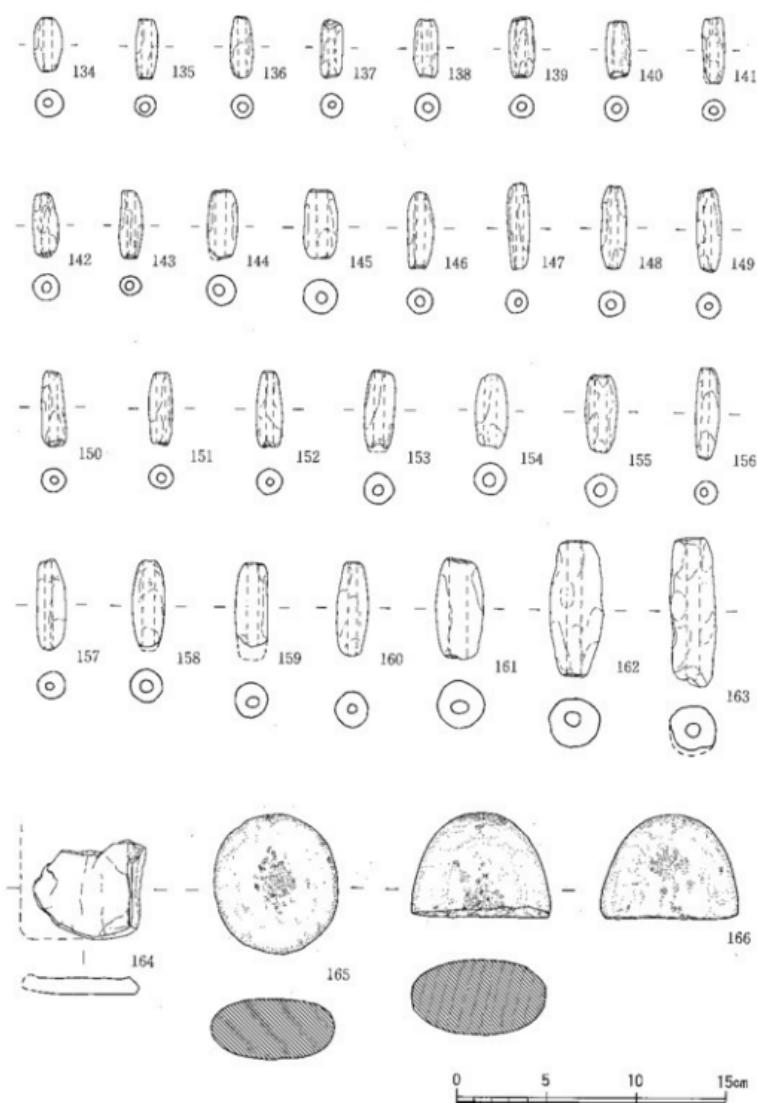


Fig. 25 遺物実測図11 (土鍤, 石硯, 命石)

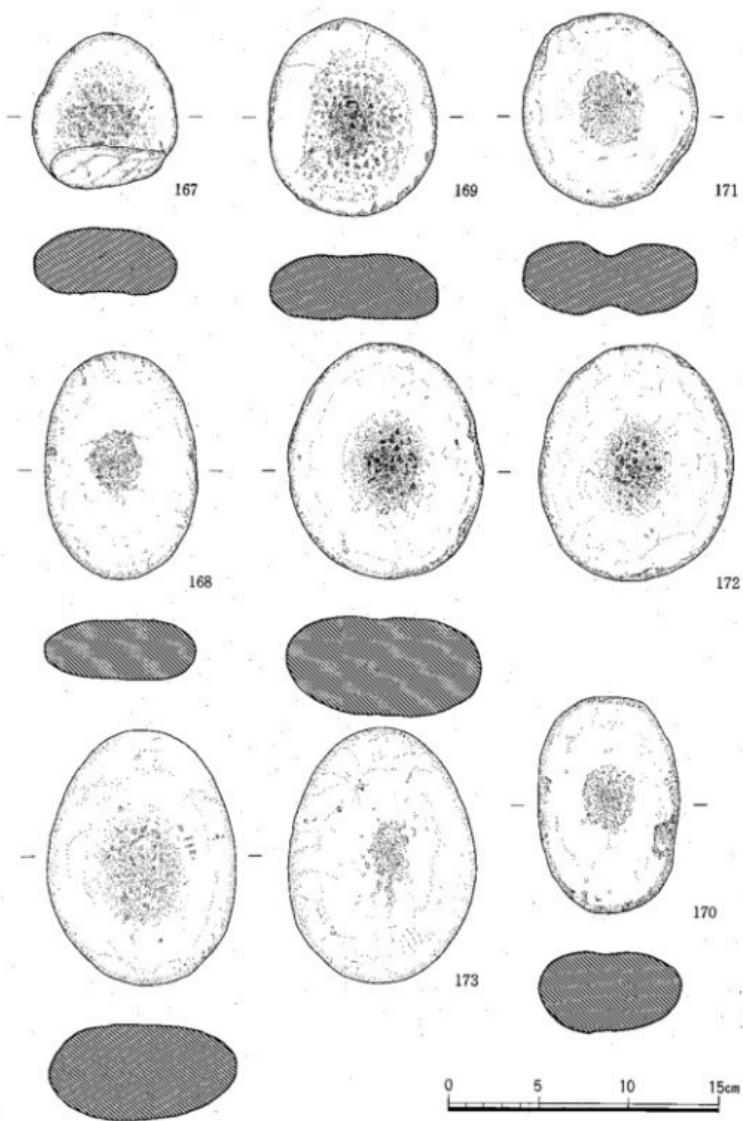


Fig. 26 遺物実測図12 (叩石)

第IV章 総論

本章では、今回報告する竹シマツ遺跡と宮崎遺跡の年代及び性格について調査結果をもとに考察を行いまとめとしたい。とくに、宮崎遺跡からは官衙関連遺物がまとまって出土しており、大方町だけでなく、幡多郡、延いては古代の土佐を考える上で注目される遺跡となろう。

1. 竹シマツ遺跡の年代と性格について

今回の調査では堅穴住居址を始めとしていくつかの遺構を検出することができた。これらは削平のためか伴出遺物が皆無に近い状態でかつ細片であったため時代を明確にすることはできなかったが、遺構の埋土及び数少ない遺物から遺構の年代等について考えてみたい。

まず、確認された堅穴住居址をみてみると、S T - 1 と S T - 2 とは切り合っているがその時期差は、双方の埋土が極めて似ていること、長軸方向がほぼ同じである点などから差程なく、ほぼ同時期で立て替え等によるものとみられる。そして、その年代は、平面形が方形である点、細片ではあるが古墳時代後期（6世紀後半から7世紀前半）頃とみられる須恵器が出土している点から古墳時代後期以降のものと判断され、本地方では古代以降住居の主流が掘立柱建物となることと考え合わせると古墳時代後期頃とみるのが妥当であろう。なお、調査当時（昭和63年）幡多地方で確認された最初の堅穴住居址であった。また、S K - 2 及び S T - 1・2 周辺のピットは同じ埋土（暗褐色粘質土）であることから住居址とほぼ同時期とみてよからう。

溝状遺構（S D - 1～5）など埋土が暗灰色粘質土である遺構は、埋土の綺麗具合が住居址のそれに比べ比較的軟らかく、色調が表土層にやや近い点、及び近世以降の遺物が含まれることなどから考えて、近世以降、中でも比較的新しい時期の所産と考えられる。この内、S D - 1～3 及び S D - 2 に伴うとみられる S D - 5 は、それぞれ西から東に向かって延び、約8.5m等間隔にあり、地山の傾斜に沿っている点などからみて、畠の畠と畠との間の通路部分畠間ではないかと考えられ、雨水によって中央部分が削られ掘り込まれた状態になったものとみられる。

これらの遺構は、T R 2 で検出したもの以外すべて表土層直下から検出され、遺構の埋土となっていた土（暗褐色粘質土、暗灰色粘質土）の堆積は認められず、開墾等により削平されたものとみられる。特に、東側の畠は少なくとも40～50cmの削平が考えられる。これら削平された土砂は、T R 2 周辺の谷部を埋めるために使用されたものとみられ、土層中には土師質土器の細片に混り中世の備前焼の擂鉢片もあり、今回は確認されなかったが、中世の遺構が存在したことが推察される。

以上、今回確認された遺構の時代及び性格について概略したが、中でも古墳時代後期とみられる堅穴住居址の確認を第1に上げることができよう。今回確認された住居址は遺存状況が不良で不明確な点もあったが、今回の調査箇所は当該遺跡の一部であり、大半は未調査となって

おり、調査結果からするとまだ何棟かの住居址が存在すると思われる。また、住居址の密度からすると本遺跡は小規模な集落であったのではなかろうか。

2. 宮崎遺跡の年代と性格について

今回の調査の契機は工事中の発見であり、急遽発掘調査を実施することとなったが、思いがけない遺物が多数出土し、予想外の成果を上げることができた。報告書の発行は調査後3年を経過してしまったが、ここに掲載した遺物は土佐の古代史を考察する上で貴重な資料となろう。以下、遺物から本遺跡の年代と性格について考えてみたい。

まず、時代決定のメルクマールとなりやすい、黒色土器、縄釉陶器等収入品についてみてみたい。黒色土器はすべて内黒土器で復元できた7点をみると内6点が壺であり、口縁部は外上方へ上がり、端部を細く仕上げている。底部は、75・76が平底で、77には小さな高台が付く。78は珍しい甕である。これらの特徴からみると比較的古い段階の製品とみられ9世紀後半頃に位置付けるものではなかろうか。縄釉陶器は10点を一応復元できた。一度の発掘調査でこれだけまとまって出土した例は県下では少なく¹⁰注目されよう。器種には壺と皿があり、口縁部は外上方へのび、端部を丸く仕上げている。底部の形態には切り高台をなすもの5点(110・113~116)、蛇ノ目高台をなすもの2点(111・112)、平底をなすもの1点(109)がみられる。これらの形態的特徴からみると10世紀以降盛んに生産された近江系縄釉陶器とは異なり、それに先行する京都系縄釉陶器とみられ、時期的には黒色土器と同じく9世紀後半頃に該当させることができるものではなかろうか。

次に、最も出土頻度の高かった土師器では、壺、皿、蓋、鉢、甕の各器種がみられる。この内、比較的まとまって出土した壺、皿、甕は前述のとおり数種類に分類することができるが、ここで行った分類は形態分類であり、今回は細かな時期差を指摘するまでは至らなかった。また、器高指数の違いは用途的な違いと捉えた方が妥当であろう。ただし、皿A-1と皿A-2のように古相、新相という捉え方ができるものも若干あり、ある程度の時期は考慮しなければいけないであろう。

須恵器は土師器に次ぐ出土であったが、その比率は約5:2と半分に満たない状況を呈している。本地方ではこの時期には需要が減少し、すでに須恵器生産が衰退期にはいったのではないかろうか。土佐国衙跡で検出した10世紀後半頃の遺構¹¹からは須恵器の出土がほとんどみられなくなる。さて、今回出土した須恵器の器種では壺、皿、蓋、高壺、鉢、壺、甕がみられ、形態分類を行った器種もあるが、各器種とも量的に少なく、土師器同様時期差を指摘し得るには至らなかった。ただ、90・92などの蓋で若干の時期差を看取することができる程度であった。

硯はすべて転用硯で、須恵器の甕の破片を利用している。使用面はすべて内面で、同心円文のタタキ目が残るもの、ナデ調整を施したものがある。野市町曾我遺跡からも6点の円面硯と共に4点の転用硯が出土しており、転用硯の内1点は蓋を転用したものである。甕の破片を転

用したのは今のところ県下で本例のみである。

墨色土器は5点が確認され、内、125は「山三」？、126は「天」？、127は「任」ではないかとみられるが、その意味は不明である。これらはすべて土師器の坏Aを使用し、書かれた部位は底部外面が4点（123～125・127）、体部外面が1点（126）であった。因に、県下で確認された墨色土器は、土佐国街跡が1点（「官」）、野市町深瀬遺跡が1点（「水」）、同町曾我遺跡が1点（「山」）であり、極めて少なく、本遺跡からの出土が最も多いことになる。

刻書土器は4点出土しており、須恵器の高坏の底部外面に「玉」と刻まれたもの（128）と製塙土器（布痕土器）に「ホ」「早ホ」「□□」と刻まれたもの（129～131）がある。文字の意味については墨色土器同様、不明と言わざるを得ない。県下では、土佐山田町大法寺古窯址群から3点（「上」、「禾」、「力」）、土佐国街跡から1点（「稟道」）、野市町深瀬遺跡から1点（「大」）が確認されており、すべて須恵器に刻まれたものであり、今回出土した製塙土器に刻書した例は極めて珍しいものといえよう。

製塙土器（布痕土器）は、先の刻書土器のものを含めると5点出土している。しかし、すべて破片であり、何個体分になるのかは明確ではない。県内では、今の所、中村市風指遺跡、野市町曾我遺跡から数点ずつ出土しているが、細片で、形態がある程度判明する資料が出土したのは今回が初めてである。これらが出土した遺跡をみると、縁釉陶器等も伴出しており、官衙関連の遺跡と捉えることができるものであり、当時製塙が海岸に比較的近い官衙関連遺跡で行われていたことが推察される。今回出土したタイプの製塙土器は、内面に布目が明瞭に残ることから布痕土器とも呼称されているもので、本地方以外では宮崎県宮崎市内野野第1遺跡を始めとして清武町下田畠遺跡・小山尻東遺跡・赤坂遺跡、宮崎市赤坂遺跡、鹿児島県加世田市上加世田遺跡などの海岸部に比較的近い遺跡で確認されている。一方、本地方の東の和歌山県などでは今のところ発見されておらず、本地方から西の地方を中心に分布するようである。

次に土製品をみてみると今回は比較的多くの管状土錐が出土し、掲載していない破片を含めるとかなりの数に上る。今回出土したものは全般に小型、軽量のもので、海ではなく河川での網漁に使用されていたのではないかろうか。なお、これら土錐は前述のとおり全長、重さから4類に分類され、10g前後以下のものが圧倒的に多かった。

石製品では石硯と叩石がみられる。前者は破片であるが、陸部が研磨されたように滑らかであり他に転用硯も出土していることから、硯とみて間違いないなかろう。後者の叩石であるが、この時代のものとしては似つかわしくないもののようにみられるが、遺物包含層から他の遺物と伴出しており、同時期のものとみることができる。県下では、中村市具同中山遺跡群や大方町早咲遺跡等古墳時代後期の祭祀遺跡からまとめて出土している。一方、土佐国街跡など古代の官衙遺跡からの出土例は今のところない。このような状況から鑑みて、単に堅果類の粉食のためにのみ使用されたのか再検討しなければならないのではないかろうか。特に、165・166など叩石としては極めて小型のもの的存在やすべて手の平に乗る程度の大きさのものであることな

どちらみて祭祀行為との関係も考慮する必要があるのかもしれない。

叙上、本遺跡出土の遺物を中心みてきた。これら遺物の年代は、黒色土器や綠釉陶器の年代からみて概ね平安時代前期、中でも9世紀後半を中心とする時期に位置付けられるのではないかろうか。前述のように若干の時期差がみられる遺物も存在することから遺跡全体としては数期に時期区分することも可能であろう。

最後に本遺跡の性格をみてみる。如上の遺物が出土する可能性のある遺跡として郡衙、郷家、駅家（駅館）などの官衙関連施設が考えられる。郡衙については、大方にあったのではないかという意見もあるが平田曾我山古墳が所在し古墳時代以降発展した中筋川流域の宿毛市山奈町山田周辺が有力視されている。駅家の所在については推定地も幡多郡ではなく不明である。郷については幡多5郷の大郷の所存が考えられている。これらのことから現段階としては大方郷の郷家とみる方が妥当ではなかろうか。なお、詳細は、遺跡の中心部が将来調査された時に譲ることとする。

3. おわりに

早咲遺跡を始めとして宮崎遺跡、竹シマツ遺跡等の発掘調査が活発に行われ埋蔵文化財に対する認識が高揚したのは、昭和61年以降のことであった。遺跡分布調査が大きな契機となったと思われる。しかし、何といっても大方町文化財担当者の熱意に勝るものはない。今後、宮崎遺跡本体の調査と保存、宮崎遺跡との関連が注目される鹿々場古窯跡の調査、早咲遺跡の保存問題等々埋蔵文化財に関わる課題は少なくない。大方町を文化面で飛躍さすのは正にこれからであり、文化財に対する変らぬ取り組みが期待される。

註

- (1) 県内では、土佐国衙跡を始めとして、土佐国分寺跡、野市町深瀬遺跡・曾我遺跡、中村市風指遺跡などで出土している。量的には、郷家跡ではないかと考えられている曾我遺跡が最も多い。
- (2) 土佐国衙跡第22次調査で検出した10世紀後半頃とみられるSX-9~11からは土師器が50点出土しているのに対し、須恵器は2点しか出土していない。

参考文献

- 『早咲遺跡』 大方町教育委員会 1991
 『海の生産用具—弥生時代から平安時代—』 埋蔵文化財研究会第19回研究集会資料
 『後川・中筋川埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 古津賀遺跡・具同中山遺跡群 高知県教育委員会
 1988・6
 『後川・中筋川埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 風指遺跡・アゾノ遺跡 高知県教育委員会 1989・3
 『曾我遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1989
 『深瀬遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会 1969
 『土佐山田町史』 土佐山田町教育委員会 昭和54年
 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第9集』 高知県教育委員会 平成元年3月

図版

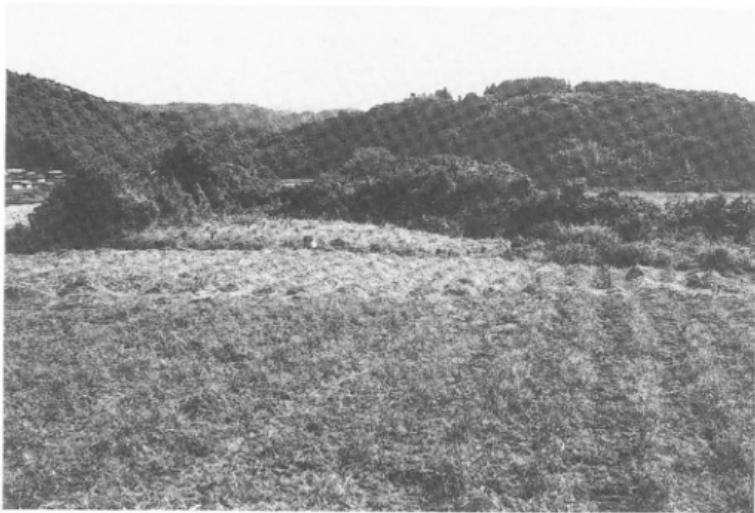
竹シマツ遺跡



S T - 1 • 2

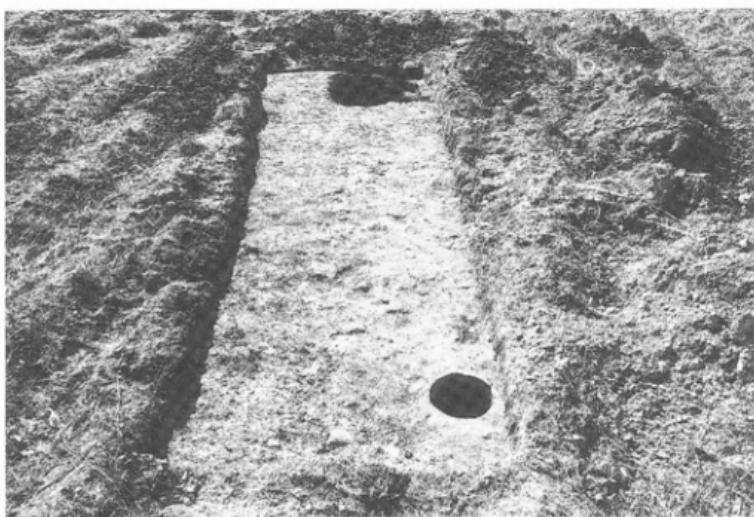


調査前全景（南より）

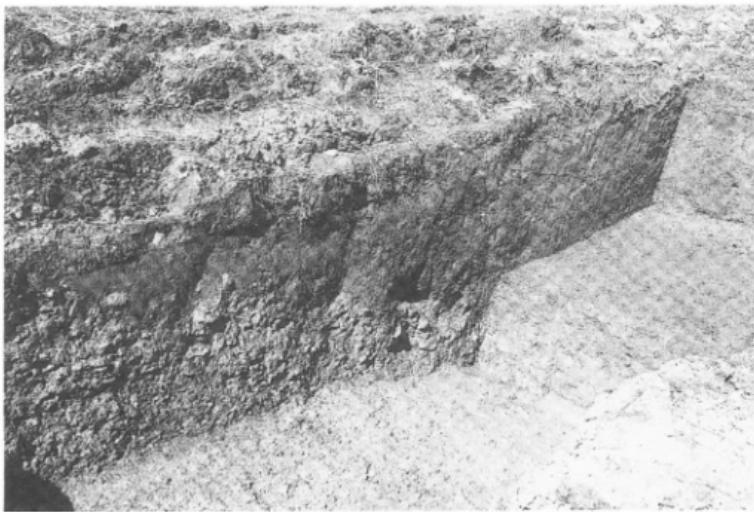


調査前全景（西より）

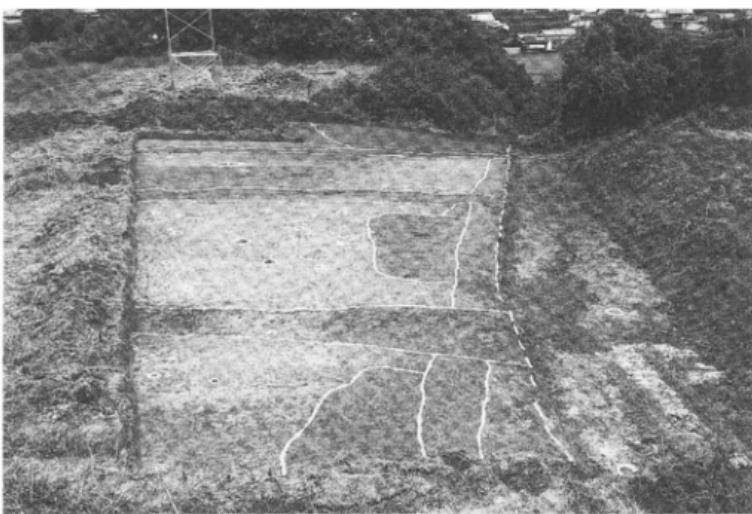
P L. 2



試掘トレンチTR 1 (東より)



試掘トレンチTR 2 (東より)

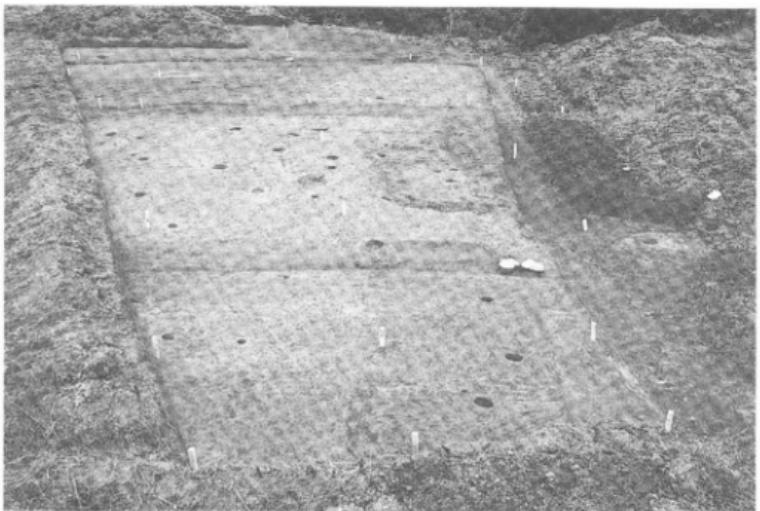


遺構検出状態（南より）



遺構検出状態（北より）

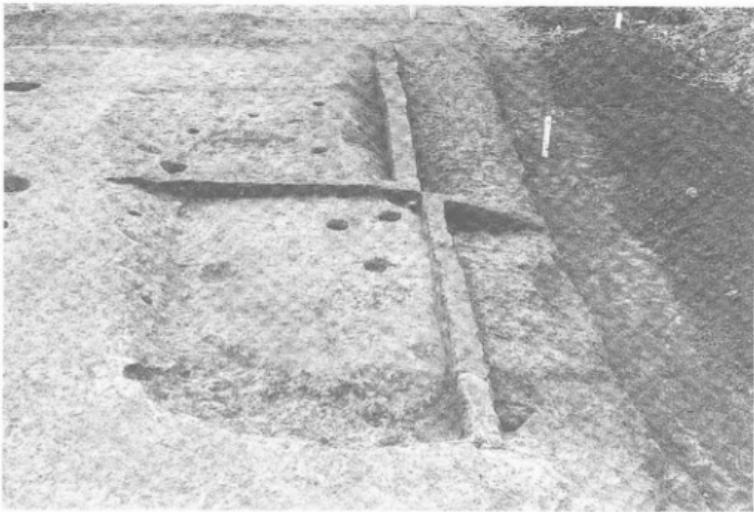
P L. 4



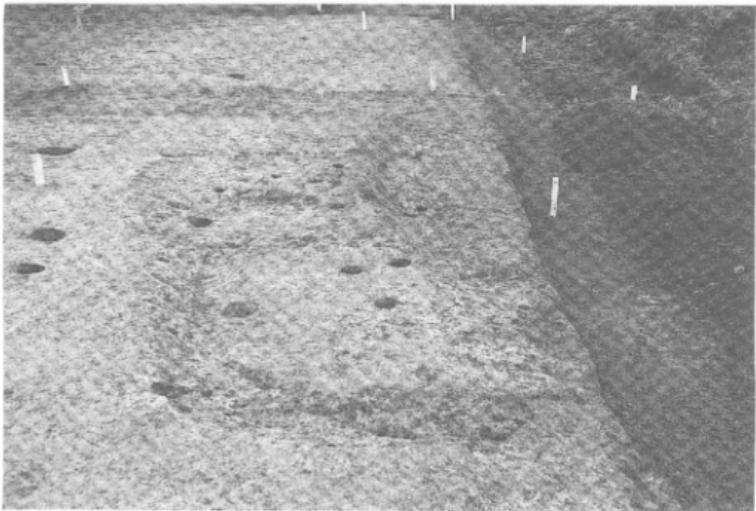
遺構完掘状態（南より）



遺構完掘状態（北より）

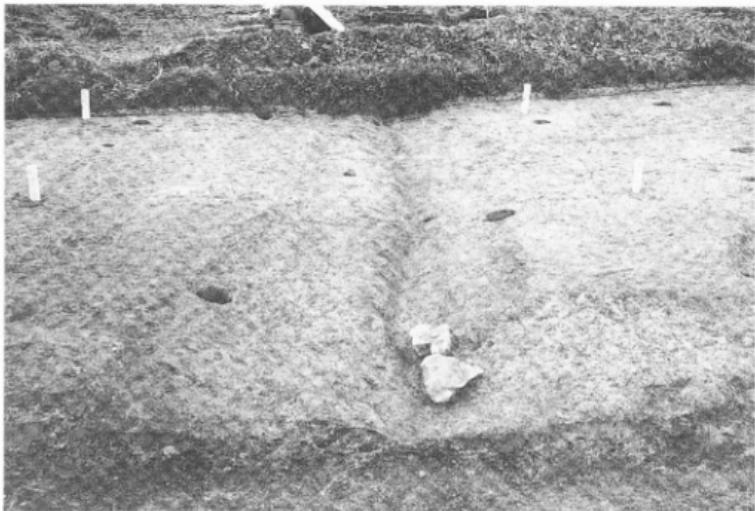


S T - 1 · 2 (南より)



S T - 1 · 2 (南より)

P L. 6

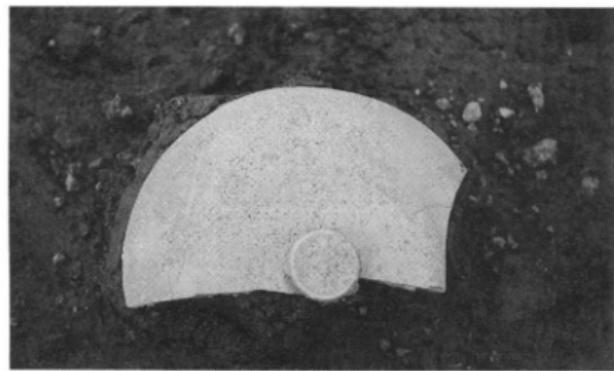


S D - 1 (東より)

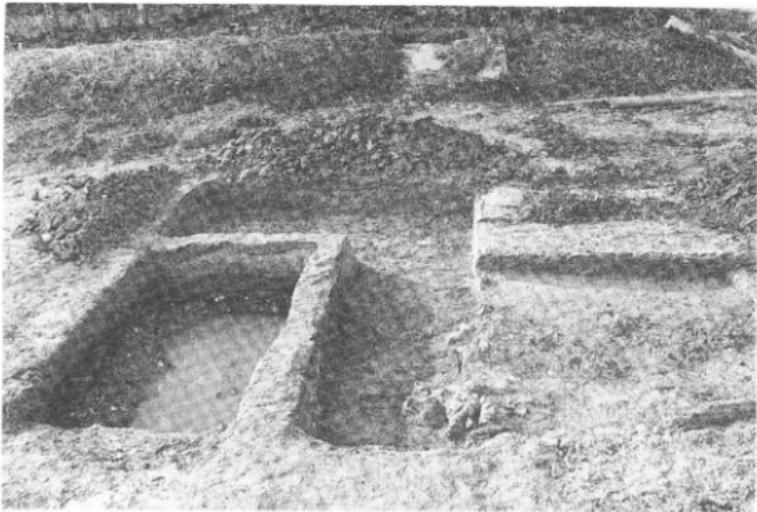


S D - 3 (西より)

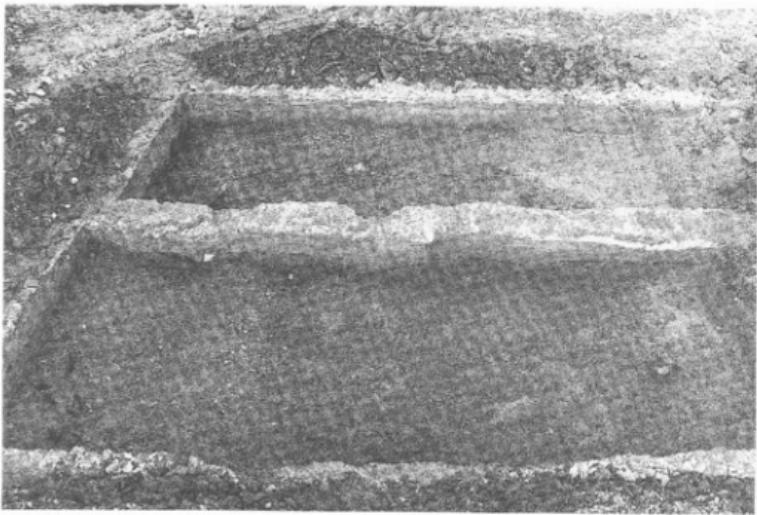
宮崎遺跡



須恵器 盖 (90) 出土状態



試掘トレンチ T R 1 (東より)

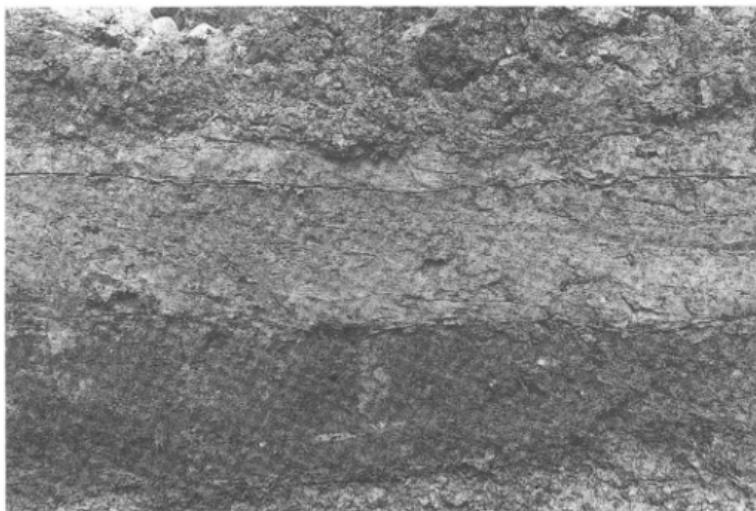


試掘トレンチ T R 2 (東より)

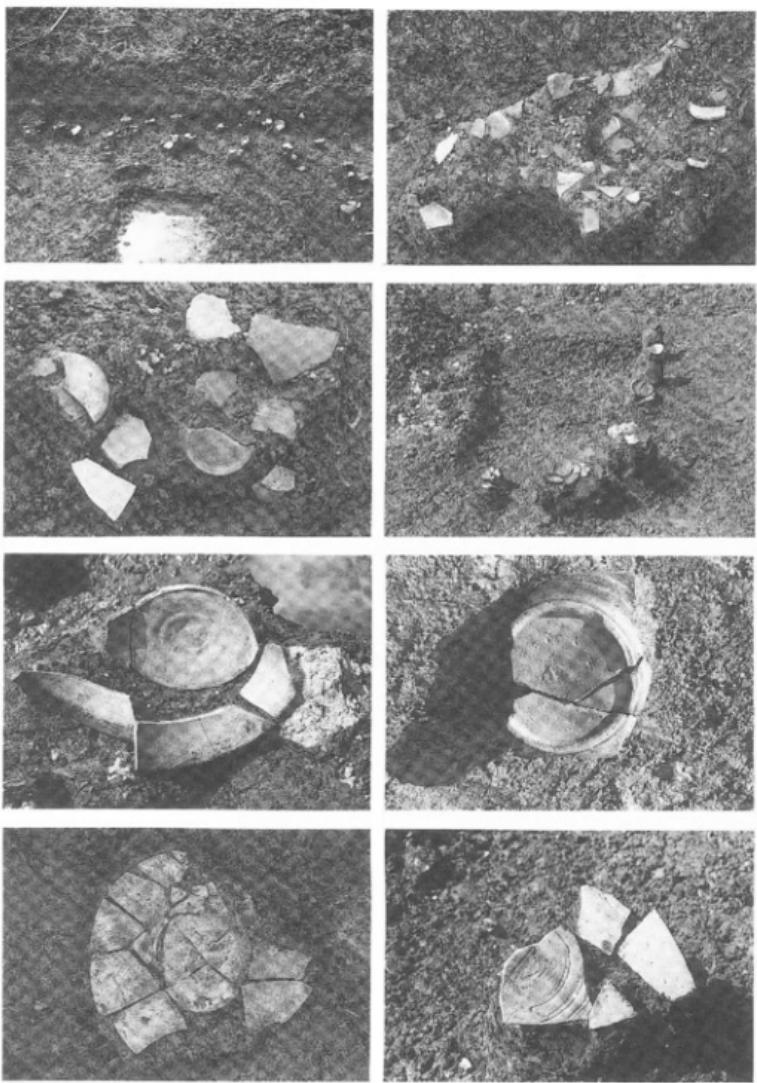
P L. 8



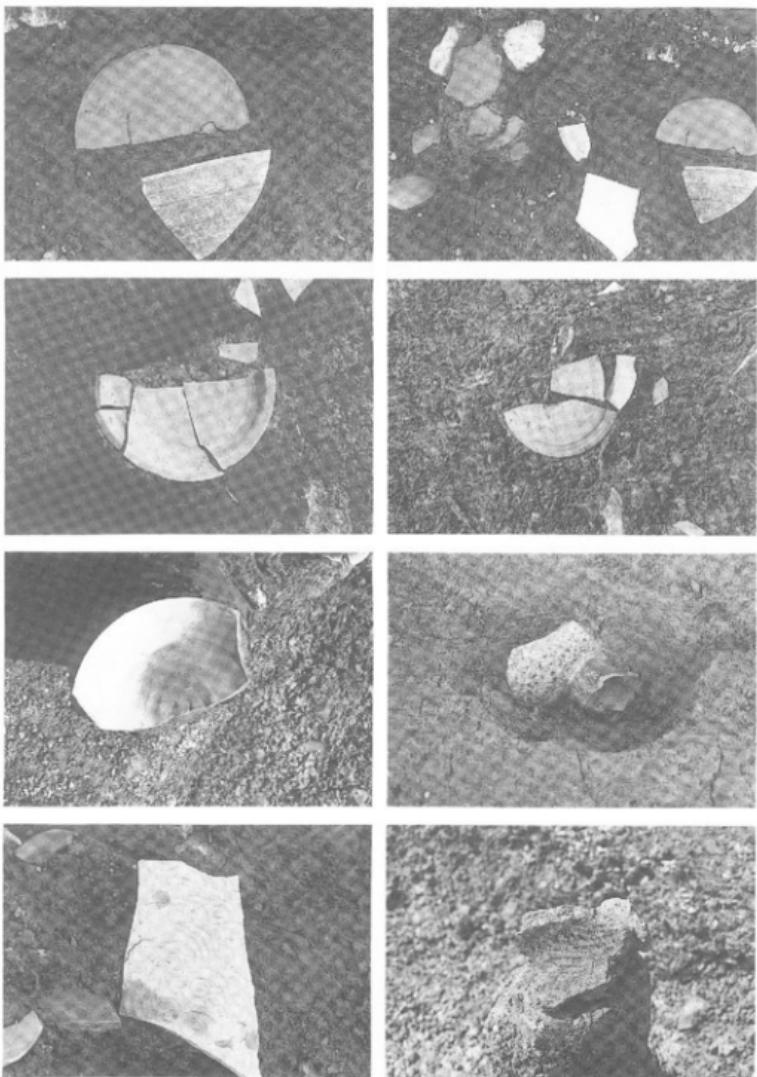
TR 1 北壁セクション (南より)



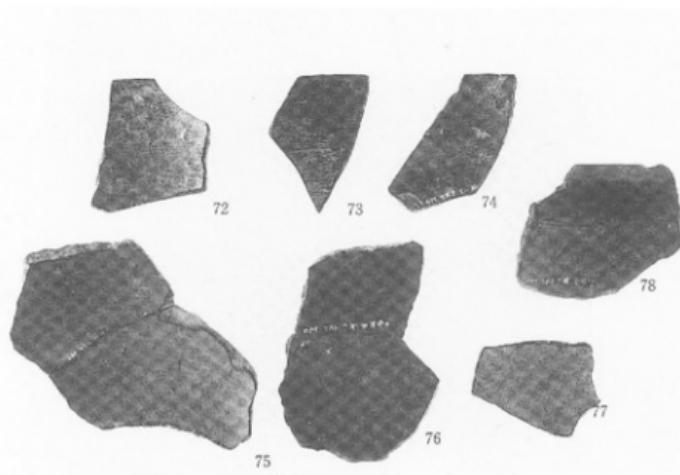
TR 4 西壁セクション (東より)



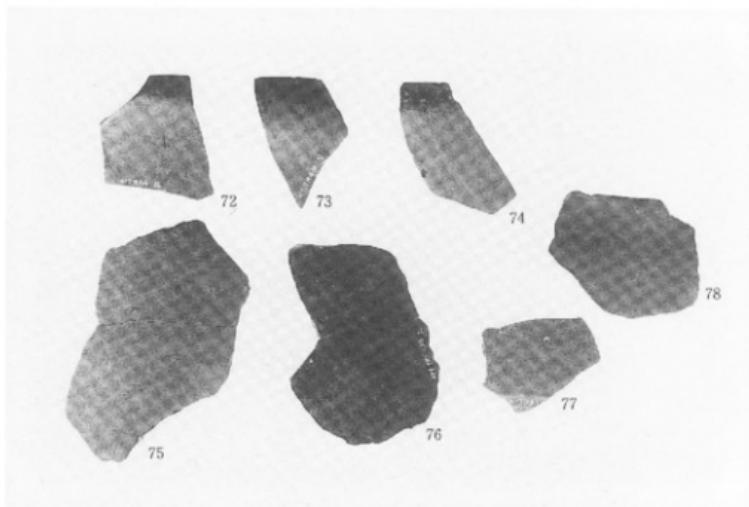
遺物出土状態 1



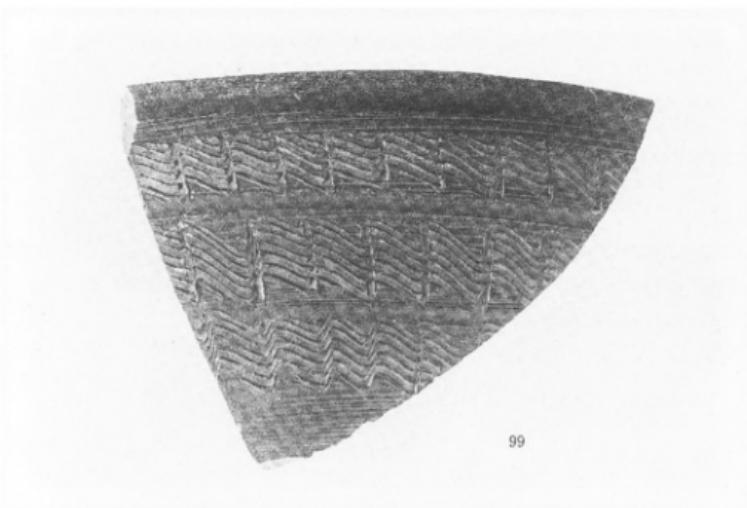
遺物出土状態 2



黑色土器（内面）

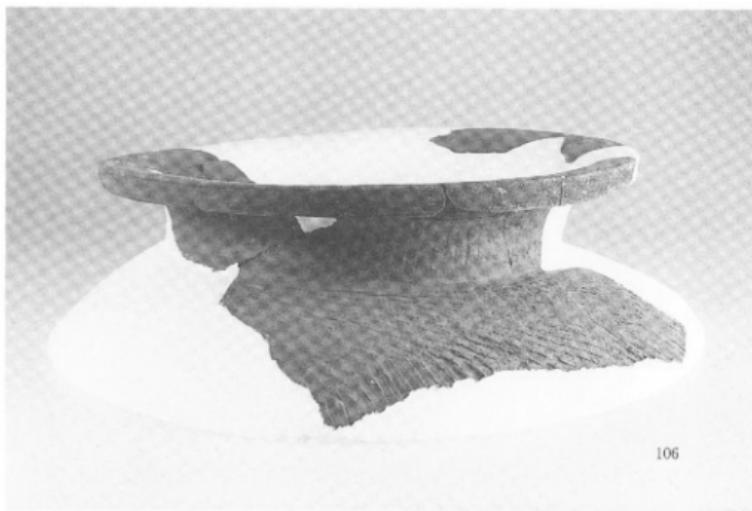


黑色土器（外面）



99

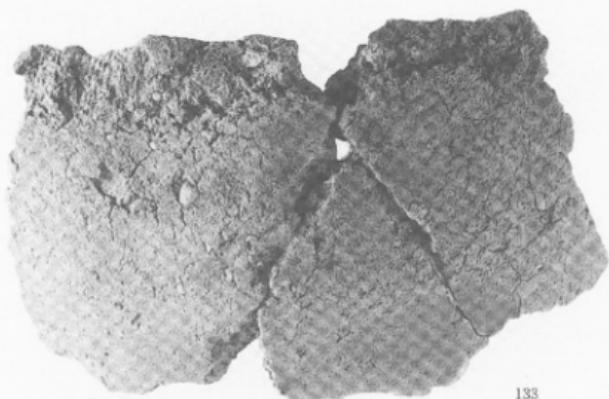
須惠器（鉢）



106

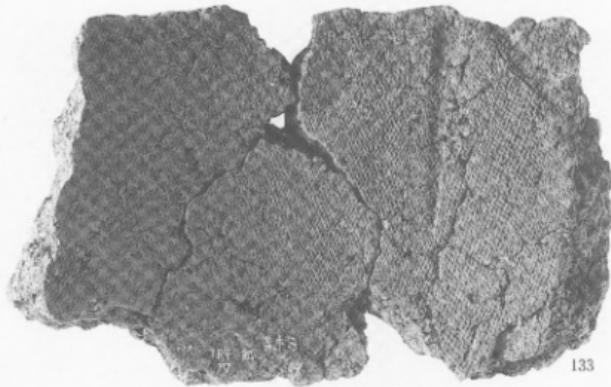
須惠器（臺）

出土遺物 2



133

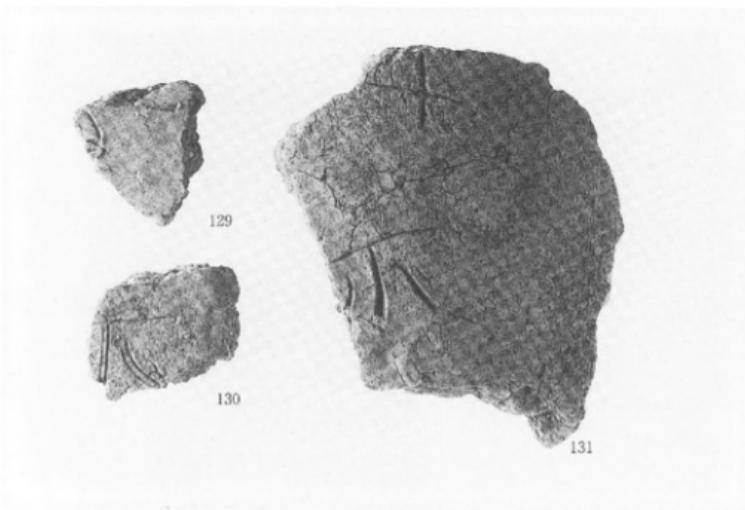
製塩土器（外面）



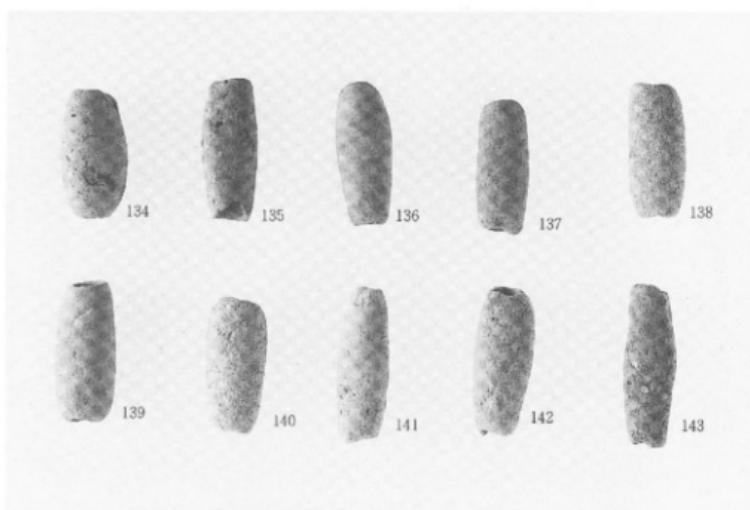
133

製塩土器（内面）

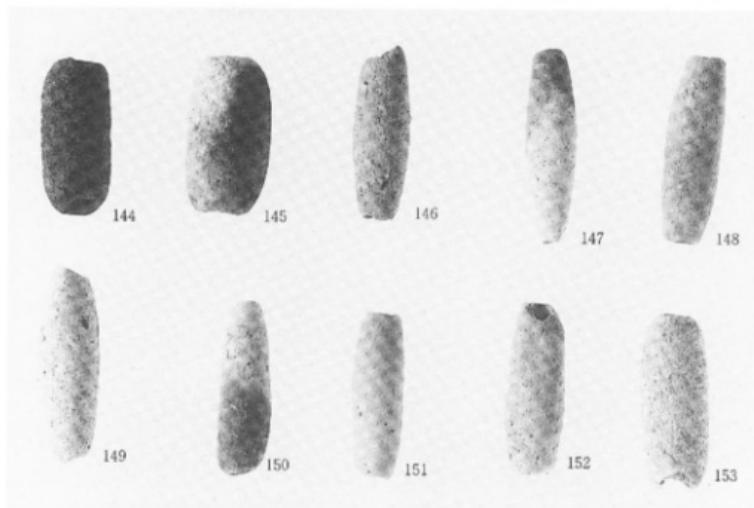
出土遺物 3



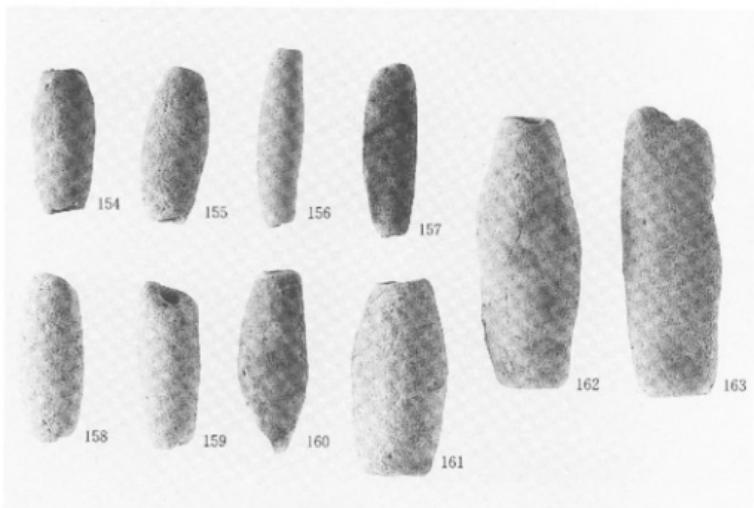
刻書土器（製塙土器）



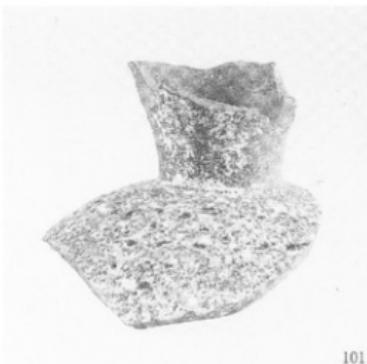
土錘



土錘



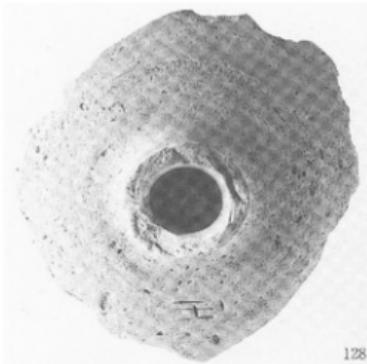
土錘



101



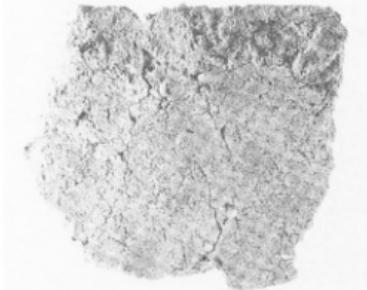
103



128



131

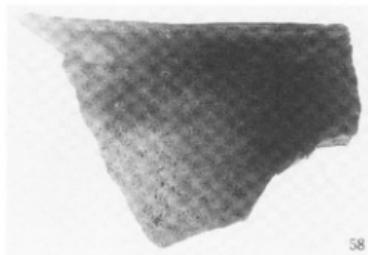


(外面)

132 (外面)



132



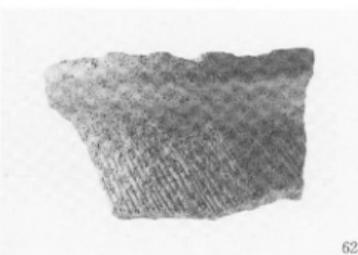
58



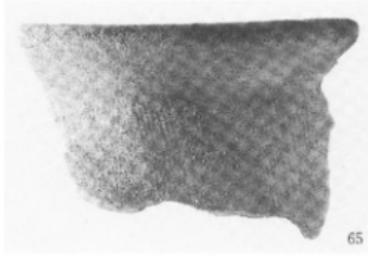
59



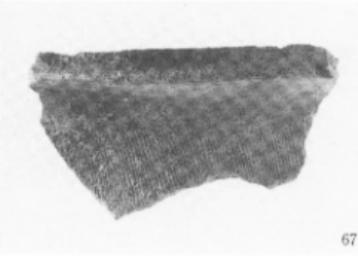
60



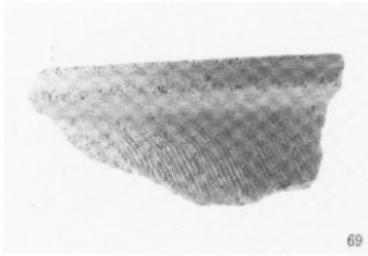
62



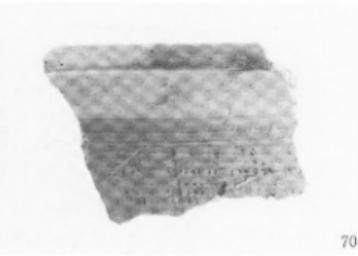
65



67

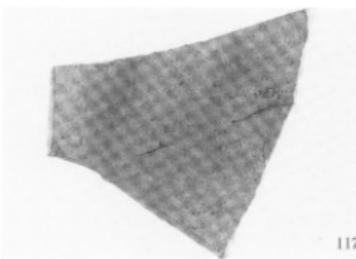


69

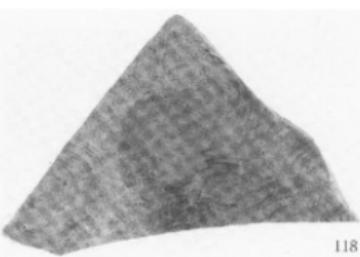


70

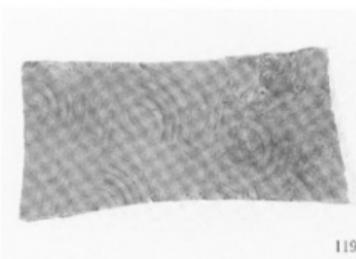
出土遺物 7



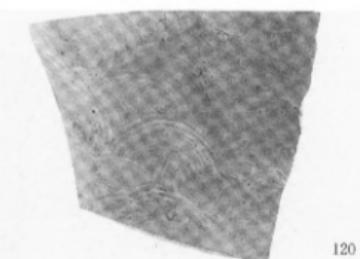
117



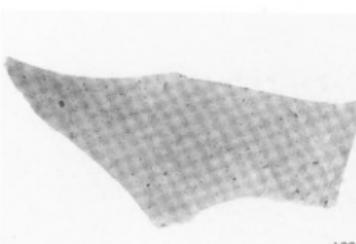
118



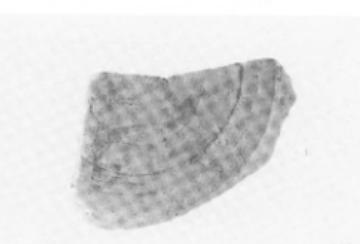
119



120



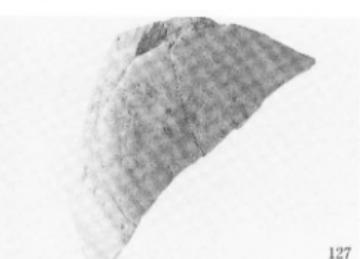
122



123

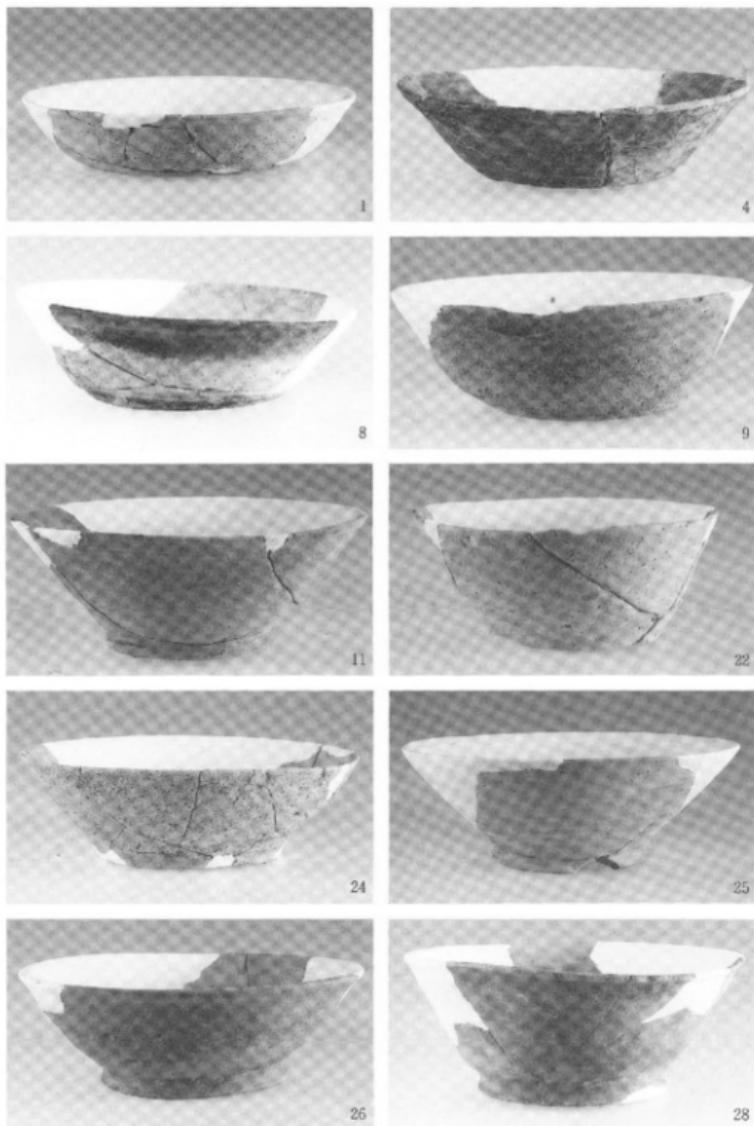


125



127

出土遺物 8



出土遺物 9